
Fate/silver night ~ 新・聖杯大争奪戦 ~

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / s i l v e r n i g h t } 新・聖杯大争奪戦

【Nコード】

N 3 5 6 6 L

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

宇宙から舞い降りた異人「天人」の台頭と廃刀令により、侍は衰退の一途を辿っていた。そんな中で、侍魂を堅持する男が一人いた。男の名は、坂田銀時。江戸で万事屋を営む銀時は、やっかい事に巻き込まれるトラブル体質の持ち主で、これまでも幾つもの事件や騒動に遭遇してきた。そして今回、万事屋の従業員である志村新八と神楽、ペットの定春と共に、銀時は世界を飛び越えた新たな騒動に巻き込まれる。聖杯戦争。手にした者の願いを叶える万能の杯、聖杯を巡る闘い。聖杯戦争に参加した万事屋が大暴れ……するかも！

？
【今回はギャグ色を強くしていきたいと思ってます】

序章：物を食べる時は落ち着いてしっかり嚙んでから飲み込みましょう（前書き

こんにちは、こんばんは。

作者の赤夜叉です。

まだ他の作品が完結してないのに、新しい小説を始めました。ほつたらかしにして、更新停止してる作品があるのに……（汗）

この作品を書き始めた理由は、ズバリ“リベンジ”です！

読んだ方も居ると思いますが、実は前にも銀魂とFate/stay nightのクロス作品を書いていたんです。えっ？ そんなの知らない？ すいません。

えー、それですね、その前作の小説を久しぶりに読んでみたんですが……酷い。マジ酷い。恥ずかしくて死にたくなりました。

なので今回、新しく書こう！ と、レベルアップした作品を書こう！ と思い始めました。えっ？ 前書きが長い？ 早く本編読ませる？ すいません。

では最後に注意を。

本作品には、作者独自の設定があったりしますので気をつけてください。

それでは、本編をどうぞ！

序章：物を食べる時は落ち着いてしつかり嚙んでから飲み込みましょう

侍の国。

彼等の国がそう呼ばれていたのは、今は昔の話。20年前、突然宇宙から『天人』と呼ばれる異人が降り立ち、侍は衰退の一途を辿っていた。廃刀令を敷かれ、侍達は剣も地位ももぎ取られた。

そんな江戸に、侍魂を持ち続ける男が一人いた。白髪の天然パーマ、死んだ魚のような目、無気力な感じを漂わせ、オマケに糖尿病寸前のその男は、一見するとただのダメ人間に見える。だが、己の武士道を必ず貫く強い意思を持ち、人を引き寄せる不思議な求心力のようなモノも備えている。

その侍の名は――坂田銀時。

*

万事屋銀ちゃん。

場所は、江戸のかぶき町。『スナックお登勢』という店の上に、万事屋という“何でも屋”がある。天人が支配し、侍を雇ってくれる所が少ない苦しい時代で、万事屋のオーナーは頼まれれば何でもやる商売を始めたのだ。

「オイオイ、どーしたんだよコレ？」

スナックお登勢の前で、視線を落として言ったのは白髪の天然パーマの男。黒い服の上に、右側だけ脱いだ形で白い着物を着ている。腰には、柄の部分に『洞爺湖』と書かれた木刀を差している。

この男が、万事屋銀ちゃんのオーナーである坂田銀時。

彼の前には、沢山のカニが入った十二個の発泡スチロールの箱があった。

「うほっ！ 旨そうなカニアル！」

銀時の隣で、嬉しそうにはしゃぐ少女が居た。雨も降っていないのに傘を差している少女は、赤いチャイナ服を着ている。髪の色はオレンジ、青い瞳に透き通るような白い肌。

名を神楽と言う。この少女、ただの少女ではない。宇宙最強の傭兵部族『夜兔族』の一人である。夜兔族とは、見た目は人と大差ないが、驚異的な戦闘力を誇る戦闘民族。夜兔族は日の光が苦手で、神楽が傘を差しているのもその為である。

「こんなに沢山のカニ、どうしたんですか、お登勢さん？」

そう言ったのは、銀時の隣にいる少年。

名前は志村新八。彼の事を説明するのに、さほど言葉はいらない。眼鏡をかけた地味ツツコミ。

地味であるが、ボケ属性の人が多い銀魂世界では、貴重なツツコミ要員なのだ。

神楽と新八は、銀時が営む万事屋の従業員である。但し、給料が払われた事は一度も無い……と思う。

「このカニは知り合いに貰った物なんだよ。冷蔵庫にしまってたんだけど、ぶっ壊れて全部いたんじまったのさ。アンタら、捨てるの手伝っておくれよ」

新八にカニの事を聞かれ、答えたのは『スナックお登勢』のオーナー兼『万事屋銀ちゃん』の大家さん——お登勢。本名、寺田綾乃。薄墨色の着物を着こなした、夜の女王、いやかぶき町の女王である。

「勿体ねーな。どうせなら、食べるの手伝いたかったぜ」

銀時は屈んで、箱の中に詰められてる力二を見つめた。

その様子を見て、お登勢が呆れた顔をする。

「ちょっとアンタ、間違っても食べようなんて考えんじゃないよ。前に腐った力二食べて、酷い目に遭ったの忘れたのかい？」

以前、万事屋トリオは、食べ物は腐る一步手前が一番うまいとか言って、腐った力二を食べた。んで、そのまま病院に運ばれてしまった。

「勘弁してくださいよ、お登勢さん。僕達だって、そう馬鹿じゃないんですから」

「一度犯した失敗を繰り返す程、侍は馬鹿じゃないんだよ」

「馬鹿にすんなよ、ババー」

言いながら万事屋トリオは、それぞれ力二の入った箱を持った。

「ハイハイ、じゃ頼んだよ」

お登勢に見送られ、銀時達は力二を捨てに行った。しばらく歩き、スナックお登勢が見えなくなった所で、三人は周りをキョロキョロと見回す。周囲に人が居ないのを確認して、銀時達は路地裏に入った。

「よし、ここなら誰もいねえ」

ニヤリと銀時は笑みを浮かべる。

「定春、頼んだアル」

神楽は、ドサツと力ニの入った箱を地面に置いた。
すると、

「ワン！」

前から白い物体がやってきた。

真っ白な毛に覆われた巨大犬が、箱の前で止まった。巨大犬の名前は、定春。神楽が飼っているペットだ。

やってきた定春は、力ニに鼻を近付け、クンクンと匂いを嗅ぎ始めた。

銀時達は、今回も力ニを食べようと考えたのだ。しかし、前回のような失敗は犯さない。今回は定春の鼻で、腐っているかちゃんと確認をしている。腐っていれば、そのまま力ニを捨てに行き、腐つてなければお登勢に黙って食べようという作戦なのだ。

「ワン！」

匂いを嗅いだ定春が、元気よく吠えた。拒絶の反応は見られない。どうやら腐る一歩手前ようだ。

「銀ちゃん！ この力ニ食べられるって！」

「でかした定春！」

「早速食べましょう、銀さん！」

定春の反応を見て安全だと判断した三人は、一斉に力ニに手を伸ばした。

素手で甲羅を剥がし、具を食べる三人。物凄い勢いで食していき、

あつという間に一箱目は空になった。

「てめーらアアア！ 一週間ぶりの飯だ！ たらふく食っとけ！」
「おおお！」

鬼気迫るような表情の銀時に、新八と神楽が応える。

実は三人共、ここ一週間まともな食事をしていないのだ。万事屋なんていかかわしい商売が、そう儲かるハズも無く、じり貧の生活を送っているのである。

バクバクと勢いを更に上げて、沢山の力二が三人の胃袋の中に収まっていくな。彼等の横では、定春も力二を食べていた。

旨そうに力二を食べ続ける三人と一匹。
だが、そこで悲劇が起こった。

「んっ！」
「がっ！」
「んっ！」
「グッ！」

突然、銀時達の動きが止まった。

顔色が悪くなっていき、力二を持つ手をプルプルと震わせている。暴食を続けた三人と一匹は、大量の力二を口の中に押し込め過ぎで、飲み込めず、喉に詰まらせてしまったのだ。

呼吸が出来ず、どんどん苦しくなっていく。

「……！」

助けを呼びたいが、喉を詰まらせて声が出せない。

嫌な汗がダラダラと流れ、ジタバタと暴れる銀時達。神楽は苦しみのあまり、隣にいる新八を殴る。殴られた新八は、「何で？」と

いような顔で倒れた。定春も爪でガリガリと地面を引っ掻き、苦しさを訴えている。

しばらく苦しんだ後、誰の助けも来ないまま、銀時、新八、神楽、定春は、ポックリと逝ってしまった。

死因——喉に物を詰まらせた『窒息死』。

*

真っ暗い空間。

どこまでも暗闇が続く空間に、何人か人影が見える。周りは真っ暗なのに、そこにいる人の姿は妙にハッキリと見えていた。

まず、地面に三人の男女と一匹の動物が倒れていた。天然パーマの男、眼鏡の少年、チャイナ服の少女、白い巨大犬。カニを喉に詰まらせて死んだハズの、万事屋トリオと定春だ。

眠ってる一同の中で、銀時は意識を取り戻して、うつすらと瞼を開けた。

「どうですかね、先輩」

「あゝ、いいんじゃないねーのコイツで」

銀時達の前で、奇妙な格好をした二人組が話し込んでいた。

全身白のタイツを着た男が二人。先輩と呼ばれた男はちよび髭を生やし、もう一人はタラコ唇をしている。

奇妙な二人組を見て、銀時は目を細めた。

「これでノルマ達成だな。いやゝ、良かったよ。『聖杯戦争』に参加する『サーヴァント』の数が揃って」

「まあ、何人か余計なものついてますが、何とかかなりますよね」

「なるなる。さっきの俺のアイデアを使えば大丈夫だって」

目を覚ました銀時に気づかず、二人のタイツ男は話を続けた。

「おい」

二人の話が一段落したところで、銀時が声をかけた。

「あつ、起きた」

「先輩がデカイ声出すからですよ」

銀時が起きても、二人はさして驚いた様子はない。

「何なんだ、お前ら恥ずかしい格好して？　つーか此処どこ？」

タイツ二人組を睨んだ後、銀時は暗い空間を見渡した。ふと視線を落とすと、傍で倒れてる新八達の姿を見つけた。

「新八！　神楽！　定春！」

銀時は声をかけるが、反応は無かった。

「デメーら、コイツ等に何しやがった？」

死んだ魚のような銀時の目が、鋭い目付きに変わってタイツ二人を睨む。声にも凄みが加わっていて、普段のダルさは微塵も感じられない。

「い……いやいやいや、俺達はお前達に何もしてねーよ」

「そ、そうそう。この『英霊の座』に連れてきただけです」

銀時に睨まれ、二人は完全にビビりながら答える。

「『英霊の座』？」

場所を聞いた銀時は、片眉を上げた。

英雄の座なんて所は、かぶき町のどこにも無いし、聞いた事も無い。それ以前に、此処は自分達がいた所なのかも怪しい。

「テメー等、何者だ？ こんな所に俺達を連れてきて、何が目的だ？」

「いや、その……僕等、バイトなもんで、詳しくは知らないんですけど……何でも『聖杯戦争』に参加する『英霊』の数が足りないらしくて、そのうえ本来『英霊の座』を担当してる者が風邪で休んじやって、急遽バイトの僕等が足りない英霊を集めるよう言われたんです。でも英霊は、みんなあっちこっち世界を飛び回ってて、なかなか時間が空いてる英霊が見つからなくて……。どうしようかと先輩と悩んでた時に、アンタ等を見つけて、此処に連れてきたんです」

「聖杯戦争？ えいいい？」

タラコ唇のタイツが答えると、初めて聞く単語と長い説明に、銀時は訳が解らないと首を傾げた。

「ま、まあとりあえず、アンタ等には、その『聖杯戦争』ってヤツに参加してもらいたい訳なのよ」とちよび髭タイツが言った。

「オイオイ、勝手に訳解んねートコに連れてきて、いきなり戦争に行けた？ 冗談じゃねーぜ。誰がんなもんに行くか」

銀時の反応は当然と言えば当然である。誰だっていきなり「戦争

に行つてこい」と言われて、納得して行く訳が無い。

それに銀時個人には、“戦争”に関わりたくない理由があつた。

「そう言わないで、参加して下さいよ」

「うるせーな。参加しねーって、言つてんだろーが。さつさと俺達を帰しやがれ、全身タイツ」

聖杯戦争に参加するようお願いするタラコ唇タイツだが、銀時は頑として了承しない。面倒事の予感がした銀時は、絶対に参加しないと心に固く決意していた。

参加を拒む銀時を見て、ちよび髭タイツがどこからともなく懐中電灯のような物を取り出した。

その懐中電灯を銀時に向けて、スイッチを押して強い光を発した。

「っ!？」

光を目にした瞬間、銀時は意識が吹き飛び、気絶して倒れてしまった。

倒れた銀時を見て、タラコ唇タイツは困つた顔になる。

「どうします、先輩？ この男、聖杯戦争に参加する気、全然無いですよ」

「んなもんお前、勝手に冬木市に送つちまえばいいだろうが。でなきやお前、俺達がバイトクビになつちまうんだぞ」

銀時を眠らせた懐中電灯『ネムネム懐中電灯』をしまいながら、ちよび髭タイツが言った。

すると二人は、何かを感じ取つて上を向いた。

「先輩。誰かが、サーヴァント召喚の儀式始めたみたいですよ」

「ちょうどいいじゃねーか。早速、コイツ等に行ってもらおうじゃねーか」

二人のタイツ男の会話が終わると、銀時達が倒れてる所に魔法陣らしき模様が浮かび上がる。魔法陣は光を発し、その輝きは徐々に強くなっていき、銀時達の姿を包んでいった。

やがて光が収まり、銀時達の姿は消えていた。

「よし。これで今日の仕事は終わりだな」

「帰ってモ○ハンでもやりますか、先輩？」

銀時達が消えたのを見届け、タイツ二人組は暗闇の空間から去っていった。

序章：物を食べる時は落ち着いてしっかり噛んでから飲み込みましょう（後書き

果たして万事屋一行は、どのマスターのサーバントになるのか？

凛は絶対に無いです。前作は、凛がマスターだったんで。

それでは。

第一訓：世の中には予想外の出来事がつきもの（前書き）

サーヴァントとなった銀時は、どのクラスになったのか？

そしてマスターは誰なのか？

第一訓：世の中には予想外の出来事がつきもの

時刻は深夜。皆が寝静まり、静寂に包まれた夜。こんな遅い時間に、外に出てる女性が一人いた。

場所は冬木市深山町にある建物。大きいとは言えないが、それなりに立派な洋風の屋敷がある。その屋敷の敷地内に、淡い紫色の光が見え、その中心に女性が居た。

紫色のローブのフードをすっぽりと被り、女性の顔はよく見えない。だが僅かに見える妖艶な口元から、かなりの美人である事が窺える。

光を放つ魔法陣の中心に立つ彼女は、ブツブツと小さく何か呟いている。何かの儀式を行っていると見ると、どうやら何かの呪文のようだ。彼女が呪文を唱え続け、ソレに呼応するように魔法陣の光が強くなっていく。

儀式を行っている女性には、ある目的があった。

それは、『聖杯』を手に入れる事だ。

『聖杯戦争』。それがここ冬木市で、間もなく本格的に始まるうとしている闘いである。あらゆる願いを叶える万能の杯——『聖杯』を巡り、七人のマスターと七体のサーヴァントで繰り広げられる殺し合い。マスターとは、サーヴァントを召喚し、使役する魔術師。サーヴァントとは、実在した英雄の魂。全部で七組の中から、聖杯を手に出来るのはたった一組。最後に生き残り、最強を証明した一組にだけ聖杯を手にし、願いを叶える事が出来るのだ。

その聖杯戦争に勝利し、聖杯を手に入れる為に、女性はサーヴァント召喚の儀式を行っている。

しかし、儀式を行っている彼女は人間ではない。七つのクラスに振り分けられ、この世に召喚されたサーヴァントの一人なのだ。

『キヤスター』——つまり魔術師のクラスとして、彼女は召喚されたのだ。しかし、自分を呼び出したマスターは愚劣で矮小な輩だ

った。そんな愚かなマスターに従う事が耐えられず、彼女はある手段に出た。マスターの魔力供給によって、サーヴァントはこの世に現界している。だからマスターは殺さないで、ただの自分の身を保つ為の魔力源として、マスターの動きを拘束して屋敷に閉じ込めている。

そうして準備を整え、彼女が取った手段は——サーヴァントの召喚。キャスターという自分のクラスを利用して、サーヴァントがサーヴァントを召喚するという綻破りな行為に出たのである。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

長い詠唱を終えたと同時に、魔力が高まり、足元の魔法陣が強烈な光を放ち、キャスターの姿を包んだ。

儀式で有り余るほどの手応えを感じ、キャスターはフードの下の口元をニヤリと歪めた。

——フフ、完璧だわ。これは間違いなく、最強のサーヴァントを引き当てたわ。

自信満々のキャスターが、視界の回復を待っていた時だった。

「ああああああ！」

光輝く魔法陣から、叫び声と共に人影が飛び出てきた。声の感じからして、人影は男のようだ。

「は？」

一瞬だけ見えた人影に、キャスターは思わず間抜けな声を出す。光が収まり、視界が戻ったキャスターが見たモノは、空中で放物

線を描く男の姿だった。男は頭からまっ逆さまに落下して、地面に頭をぶつけた。

「ごがつ！」

頭部に強い衝撃を受け、激しい痛みが男の全身を襲った。

「いだだだ！ 頭割れてない？ 脳ミソ出てないコレ！？」

両手で頭を押さえながら、男は地面の上で足をジタバタさせ、ゴロゴロと転がって全身で痛みを訴えている。

先ほどまでシリアスな雰囲気であったが、男の登場で一気に場の空気が変わった。もう緊迫感ぶち壊しである。

キャスターは、大魔術師である自分が召喚に失敗したのではないかと、一瞬不安になった。それほどまでに、衝撃的な召喚だったと言うか、アホな展開だったのだ。

月明かりによって、男の姿が見えてきた。白髪の天然パーマ、黒い服の上に白い着物、腰には一本の木刀が差してある。それに背中には、カタカナで『アサシン』と書かれた紙が貼られていた。

——アサシン！？ こんな間抜けな登場をした男が、アサシン！？ と言うか、それ以前に本当にこの男サーヴァントなの！？

キャスターは疑いながら、自分の右手の甲を見た。そこには、奇妙な形をした紋様が現れていた。それはサーヴァントを律する三つの絶対命令権であり、マスターとしての契約が完了した証である『令呪』であった。

「嘘っ！？ ホントにこの男が、私のサーヴァント！？」

信じられないと言った顔で、キャスターは令呪を見つめた。

「いてて……！ ああ、くそっ！ 何がどうなってるんだ？」

ようやく痛みが治まってきて、天然パーマの男——銀時は頭を擦りながら起き上がった。

「ん？」

頭の痛みを感じながら辺りを見回していると、目の前に立っているキャスターが目に入った。

紫色のローブを着て、フードを目深に被って顔はよく見えない。また雰囲気が普通の人と違い、何か得体の知れない気配も感じる。

「ねえ……貴方が私のサーヴァントでいいのかしら？」

何だか少し疲れた様子で、キャスターが尋ねた。大量の魔力を使つてまで召喚したサーヴァントが、死んだ魚のような目をした無力感に満ちた男なので、期待していただけに失望感は大きかった。

まだ痛んでる頭を擦りながら、銀時は答える。

「さあバンド？ ワリーけど、俺はバンドはしねーぞ」

「バンドじゃなくてサーヴァントよ！」

銀時のポケに、キャスターは声を荒げてツツコんだ。

「オイオイ、夜中にデケー声出すなよ。近所迷惑だろ？」

「貴方がふざけた事を言ってるから、怒鳴ってるんじゃない！」

「短気は損気だぜ？ カルシウム摂れ、カルシウム摂れば全てうまくいく」

「うるさいわね！ 何よ！ うまくいってないような、天然パーマな頭して！」

「あつ！ テメー、天然パーマの事は言うな！ 人間はコンプレックスをバネにして、より高みを……！」

深夜の敷地内で、銀時とキャスターが口喧嘩を始めた。
約10分程経ってから、二人はようやく口喧嘩を終えた。

「……で？ 貴方が私のサーヴァントでいいのかしら？」
「だから、そのサーヴァントってのは何なんだよ？ つーか、ここ何処？」

周りをキョロキョロと見回して、銀時が尋ねた。

銀時の言葉を聞いて、キャスターは訝る。

「ちよつと貴方……まさかサーヴァントを知らないの？」
「ああ、知らねーし、聞いた事も……いや、聞いた事はあるが、ソレが何なのかは知らねー」

サーヴァントという単語は、タイツ二人組から聞いたが、銀時はその言葉の意味を知らない。ロクな説明も無いまま、いきなり知らない場所に飛ばされたのだ。

銀時の言葉を聞いて、キャスターは深い溜め息をついた。

「サーヴァントと言うのは、実在した英雄の魂なのよ」
「え？」

「生前に偉業を成し遂げた英雄は世界に認められ、死後『英霊の座』へと迎えられて聖杯によって七つのクラスに当てはめられ、この世に召喚されるのよ。クラスは、『剣使い』^{セイバー}、『槍使い』^{ランサー}、『騎乗兵』^{ライダー}、『狂戦士』^{バースカー}、『弓使い』^{アーチャー}、『魔法使い』^{キャスター}、『暗殺者』^{アサシン}の七つ。貴方は一度死んで、アサシンのサーヴァントとして私に召喚されたのよ」

キャスターがサーヴァントについて説明すると、銀時の顔色が悪くなっていった。額から嫌な汗を流し、手も小刻みに震えている。

「……え？　って事は……俺って死んでるの？」

「そうよ」

「つまりその……ゆ、ゆゆ……幽霊って事か？」

「幽霊なんかと一緒にされるのは心外だけど、まあそう考えていいわよ」

キャスターが言った後、銀時は思い出した。黒い妙な空間に着く前に、カニを喉に詰まらせて死んだ事を――。

「気絶しろオオオ、俺！　気絶しろオオオ！」

いきなり銀時は、屋敷の壁に頭を叩き始めた。自分が死んでいる事にショックを受けて、暴走しだしたのだ。更に銀時は、幽霊が苦手なので、自分がその幽霊である事が認められなかった。

「ちよつとオオオ！　貴方、何やってるのよオオオ！」

銀時の突然の暴走に驚きながらも、キャスターは後ろから羽交い締めして止めようとする。

「幽霊なんてありえねエエエ！　絶対認めねえ！　許さん、許さんぞオオオ！」

「ああもう！　いい加減に――」

我慢の限界に達したキャスターは、羽交い締めを解いて両手を銀時の腰に回した。

「――しなさああああい！」

全身に力を入れて、銀時の体を持ち上げ、そのまま銀時の頭を地面に叩きつけた。

「！」

キャスターの見事なバックドロップが決まり、銀時は声にならない痛みを覚えて、地面の上をゴロゴロと転がる。

「とにかく、貴方は私のサーヴァントで、私は貴方のマスター！
これからは、私の言う通りに動くのよ！ 分かったかしら？」

ビシッと銀時を指差して、キャスターが言った。

「わかった……わかったから、もう勘弁してくれ。俺は攻められる方よりも攻める方なんだ」

頭を押さえながら、銀時は痛そうな顔でフラフラと立ち上がった。何処の世界でも、女性という生き物は強いものだ。銀時の世界にも、志村妙という新八の姉がいるが、彼女もキレると圧倒的な暴力で周りを黙らせる。

「それじゃあ、とりあえず貴方の真名を教えなさい」

「真名？」

「英雄だった頃――つまり生前の名前よ」

「ああ、はいはい名前ね。俺は坂田銀時。江戸で何でもやる“万事屋”ってのをやってんだ」

「サカタ、ギントキ……」

銀時の名前を頭の中で反芻しながら、キャスターは記憶を辿る。坂田銀時という名前と先ほど彼が言った“江戸”という地名から、銀時が日本の英雄だという事は解った。だが、どんなに記憶を探っても坂田銀時という英雄の情報が出てこない。日本の歴史も、ある程度は頭の中に入っているの、何の情報も無いのはおかしい。見た感じから疑っていたが、銀時が本当に英雄なのかどうか怪しくなってきた。

問いただそうかと思ったが、銀時の相手をして疲れたので明日にする事にした。

「じゃあ銀時。貴方に命令を下すわ」

言いながらキャスターは、門の方を指差した。

「貴方は今日から、門番として入り口を護りなさい」
「は？」

銀時は、ピクリと片眉を上げた。

「ソレってアレか？ 俺にずっと外に居て、見張りをしろって事か？」

「そうよ」

不満を露にした顔の銀時に対して、キャスターは笑って答えた。

「冗談じゃねーぜ。万事屋は、パシリじゃねーんだよ。しかも、こんなクソ寒い夜に……」

冬木市は、まだまだ寒い冬の季節。寒空の下にずっと居ろという

のは、なかなか酷な話である。

「あら？ 嫌なら令呪を使ってもいいのよ？」

「令呪？」

銀時が目を細めると、キャスターは右手の甲に浮かぶ令呪を見せた。

「令呪とは、サーヴァントに対する三度限りの絶対命令権よ。つまり私が令呪を使えば、貴方を好きなように使う事が出来るの」

「な……！？」

令呪の説明を聞いて、銀時は驚愕した。つまりここで断つても、令呪で強制的に動かされるという事だ。

動揺する銀時だが、何とか平静を装う。

「いやいや、んな便利なモンがあるわけないだろ？」

「なら、今ここで試してもいいのよ？ 例えば、自分の天然パーマを更に酷くしなさいと私が命じれば――」

「門番やらせていただきます！」

軍隊のようにビシッと敬礼し、銀時は門番の仕事に就く事になった。ただでさえ天然パーマにコンプレックスを抱いてるのに、更に酷い事になったらまったもんじゃない。

「じゃあ頼んだわよ」

キャスターは満足げな笑みを浮かべ、屋敷の玄関に向かっていく。

「おい」

「何かしら？」

銀時に呼び止められ、キャスターは止まって振り返った。

「お前の名前は何て言うんだ？」

「私は……キャスターよ」

答え終わると、キャスターは屋敷の中に入った。
ボタンと扉が閉まり、外には銀時だけが残った。

「あれ？ キャスターって、サーヴァントのクラスの中の一つじゃなかったっけ？」

ふと疑問が浮かんだが、考えるのも面倒なのですぐに頭の中から消した。

やれやれと頭を掻きながら門の前に立った時、銀時はある事を思い出した。

「あれ？ そっぴや、新八達は何処だ？」

そう呟いた銀時の背中には、まだ『アサシン』と書かれた紙が貼ってあった。

第一訓：世の中には予想外の出来事がつきもの（後書き）

今回は、キャスターのマスターが登場します。

新八と神楽、定春の行方？

それは秘密です（笑）

第二訓：誰にだって苦手なものはある（前書き）

銀時「キャスター。アンタ昔の英雄なのに、何でバックドロップなんて出来んだよ？」

キャスター「怒りに任せたら、体が勝手に動いたのよ」

この作品のキャスターは、最初のマスターを殺してません。なので、葛木と出会ってませんので、ご注意を。

第二訓：誰にだって苦手なものはある

サーヴァントの召喚を終えたキャスターは、屋敷の地下室にやってきた。

地下室は火が灯された数本の蠟燭の明かりだけで薄暗く、棚には様々な書物や怪しげな液体の入ったビーカー等がズラリと置かれており、普通とは違う異様な雰囲気を漂わせている。入るのを少し躊躇してしまう位に不気味なこの地下室は、魔術師が魔術の鍛練や研究に使う工房なのだ。本当は、この屋敷の主が使っていたのだが、キャスターが召喚され、屋敷の主が拘束されてからは彼女が使用している。

椅子に座ったキャスターは、深い溜め息をついた。

悩みの種は他でもない、先ほど自分が召喚したサーヴァント——
坂田銀時だ。

何と言うか、あまりにサーヴァントらしくない男だった。英雄と呼ぶには程遠く、寧ろソレと正反対のようなダメ人間に見えた。日本の歴史の中に、坂田金時という人物が居るが、おそらく関係ないだろう。

完全にハズレを引いた。

マスターは出来損ないだし、サーヴァントはちゃんばらん。果たしてこんなんで、聖杯戦争を勝ち抜く事が出来るのだろうか？

キャスターの胸中は、不安で一杯だった。思わず泣きそうになった。

とりあえずキャスターは、自分がすべき事を考えた。まずは明日、銀時の正体と戦闘能力を把握しなければならない。こちらの戦力を確認して、それから今後の活動を決める事にした。

仮にもサーヴァントなのだから、銀時がそれなりの実力を備えている事を願い、キャスターは一人夜を過ごした。

＊

翌朝。

キヤスターは地下室を出て、外で門番の役目をしている銀時の元へ向かった。玄関を開けて、眩しい朝日を浴びながら外に出た。

「ふあゝ」

外に出てすぐに、欠伸が聞こえてきた。

門に寄りかかり、ボリボリと頭を掻いて門番をしている銀時の姿が目に入った。気配に気付いた銀時は、振り返ってキヤスターを見た。

「よお。異常なしであります、人使いの荒いご主人様」

「……人使いが荒くて悪かったわね」

銀時の言葉にムツとしながらも、キヤスターは怒りを抑えた静かな声で言った。昨夜みたいな激しい言い争いになり、無駄に疲れるのはもう御免だ。それにこの男のダラけた顔を見ると、こちらまで気が抜けてしまう。

すぐに冷静になり、思考を切り替えたキヤスターは、早速本題に入る。

「銀時。私は貴方のマスターとして、貴方の事をよく知っておく必要があるの。だから私に、貴方の事や貴方が住んでいた時代・世界の事を詳しく教えなさい」

「オイオイ、こちら寒空の下ですーっと門の前に突っ立って見張りしてたんだぜ？　ちったあ休ませてくれてもいいんじゃないか？

「つーか、朝飯食わせてくんない？」

銀時が断って朝食を求めると、キャスターは右手の令呪を見せる。

「話、聞かせてくれるかしら？」

ニツコリと笑うキャスター。しかしその笑顔の裏には、黒い感情が隠れていた。

「はい……教えます」

青ざめた顔を引きつらせ、銀時は怯えながら頷いた。令呪の脅しもあるが、一番恐ろしく感じたのはキャスターの笑顔だった。口元だけしか見えないが、あの笑顔は妙の黒い笑みと同種の笑みだった。銀時が怯えるのも無理はない。

キャスターの笑顔の脅しで、銀時は話を始めた。

銀時が住んでいる江戸は、昔は『侍の国』と呼ばれていたが、今は宇宙からやって来た『天人^{あまんと}』によって支配されている。そんな江戸のかぶき町で万事屋を営む銀時は、ある日、従業員の新八、神楽、それに定春というペットと一緒に大量の力二を食べて喉に詰まらせ、死んでしまった。死後、真つ黒い妙な空間で目が覚め、そこで全身タイツ二人組と出会い、無理矢理サーヴァントにされて、ここにやってきた。

包み隠さず、銀時は全てを話した。

話を聞いたキャスターは、色んな意味で驚いていた。まず、宇宙人が存在している事に驚いた。自分も生前は様々なモノを見てきたが、宇宙人と会った事は無い。中でも一番衝撃的で呆れたのは、力二を喉に詰まらせて死んだという点だ。いずれの英雄も名誉ある戦死、または裏切りによる悲劇、神話等に語り継がれてる壮絶な最期を遂げているのに、力二を喉に詰まらせて死んだ英雄など初めて聞

いた。しかも銀時の話には、英雄らしい活躍が全く無かった。まず銀時が英雄なのか、怪しくなってきた。全身タイトの男なんてのも、ふざけた話である。

とりあえず、この男の話で解った事は、銀時は別の世界からやってきた英霊（一応）だという事だけだった。

ただ、銀時の話の中で、一つ疑問があった。

英霊の座には、銀時以外にも人が居た。新八、神楽、定春の二人と一匹も居て、どうやら彼等もこの世界に飛ばされたみたいなのだ。しかし、それはおかしい。聖杯戦争で召喚されるサーヴァントの数は、七体と決まっている。この数は、今まで狂った事は一度も無い。銀時を召喚した前に、既に数体のサーヴァントが喚び出されている。その新八達までこの世界に現界したら、規定の数を超えてしまう。

——ああもう！ 何が何だか解らなくて、頭がゴチャゴチャするわ！

妙なサーヴァントを召喚したせいで、キャスターは軽く荒れていた。これもサーヴァントがサーヴァントを召喚するという綻破りな行為をした報いだろうか？

「おい。俺の事は教えたんだから、今度はアンタやこの世界の事について教えるや。こつちだって訳解んねー目に遭って、頭の中ゴチャゴチャしてんだよ」

元々ゴチャゴチャしてるでしょ！ 見た目が！ と怒鳴りたかったキャスターだが、そこは何とか感情を抑えた。

ここは、銀時が居た世界とは別の世界。冬木市と呼ばれるこの地で、聖杯戦争という儀式が始まるうとしている。あらゆる願いを叶える万能の杯である聖杯を巡り、七人の魔術師がサーヴァントを召喚し、最後の一組になるまで互いに殺し合う。キャスターは、マスターである魔術師の自由を奪い、自分がサーヴァントを召喚して参

戦しようと考え、銀時を喚んだ。サーヴァントとして喚ばれた銀時は、聖杯戦争に参加する事が決まってしまったのだ。話を聞いた銀時は、不快そうに顔をしかめた。

「随分と悪趣味な儀式だな」

「まあ、あまり愉快的な話ではないわね」

キャスターの言葉を最後に、会話は途切れた。

両者が口を閉じて、場に沈黙が生まれた。静寂な敷地内に、小鳥の鳴き声が響く。

「……一つ聞きてえ」

先に沈黙を破ったのは、銀時だった。

「もし俺が何もしなかったり、アンタとの契約を切ったりしたら……アンタはどうなるんだ？」

「そうね……他のサーヴァントに消されるのがオチでしょうね。私は魔術師としては優れているけど、戦闘に関してはサーヴァントの中でも最低ランク。策を巡らせて時間を稼げても、一人で生き残るのは難しいわね」

淡々とした口調で、キャスターは答えた。

それを聞いた銀時は、空を見上げて何か考えている。

戦争という言葉で、銀時の脳裏に過去の光景が蘇った。戦場に来た沢山の死体の山、山、山。散っていった仲間達の屍の真ん中に立つ、自分の姿。どしゃ降りの雨を全身に受けて、黒い雨雲を見上げている。

過去を思い返した銀時は、ある決心をした。

「まったく、しょうがねーな」

グシャグシャとメンドくさそうに頭を掻き、銀時は続ける。

「正直、殺し合いなんざ乗り気しねーし、誰がどこで何しようが知ったこっちゃねえ。……けど、成り行きとはいえ、ご主人様であるアンタを放っておく訳にもいかねえ」

「貴方……」

キャスターが、意外そうに口を開いた。

頭を掻くのをやめ、銀時は真っ直ぐな眼差しをキャスターに向けた。

「なつてやるよ、アンタのサーヴァントに。アンタを護る為に、剣コイツを使うぜ」

「……そう。まあ、せいぜい頑張ってもらっわよ」

憎まれ口を叩くキャスターだが、心の中では少し嬉しく思っていた。

生前、度重なる裏切りに遭ったキャスターにとって、人とは信用出来ない存在だと思っていた。だが、目の前にいる男は、決して自分を裏切らないような気がした。同時に、「護る」と言われて嬉しくもなった。

それとキャスターは、銀時の瞳に光が走ったような気がした。今はもう、元の死んだ魚のような目に戻っているが、嬉しい感情を押し殺して、キャスターは言った。

「それじゃあ、次は貴方の実力を確かめさせてもらっわ。マスターとして、サーヴァントの力を知っておく必要があるの」

「いや、それよりも俺、朝飯食いたいんだけど……」

「問答無用！」

やんわりとした銀時の意見を一蹴し、キャスターはローブの中から一本の杖を取り出した。

そして呪文のような言葉を小さく呟くと、銀時の周囲に複数の人影が現れた。だが、ソレは人ではなかった。人の形をした骨の化け物が、銀時の周りを囲んでいた。顔は目や鼻が無く、ギザギザの鋭い牙を持つ口だけで、首から下は人間の骨組みと同じ仕組みの体をしており、中には剣等の武器を持っている化け物もちらほらと見える。

「うおおあああああ！ あ、悪霊退散！ 妖魔降伏！」

お化けの類が苦手な銀時は、顔を真っ青にさせて叫んだ。完全にビビっている。

「落ち着きなさい、銀時。ソレは、私が竜の牙から作り出した『竜牙兵』という傀儡兵よ」

「傀儡兵？ あ、ああ、そうか。魔術ってヤツか。いやアレだから、別にビビってねーから。急に出てきて、ビックリしただけだから」

幽霊じゃないと解った途端、銀時は怖がっていたのを否定し始めた。

しかし、誰がどう見ても銀時が怖がっていたのは明らか。

必死に幽霊が苦手なのを隠そうとしてる銀時に、キャスターは呆れて溜め息をつく。この男に対して溜め息をつくのは、果たして何度目だろうか？

「ここにいる竜牙兵は、全部で五十体。コレを一人で全部片付ける事が出来たら、食事を用意してあげるわ」

食事と聞いて、銀時は目の色を変えた。

「しょうがねーな。まあ、働かざる者食うべからずって言うしな」

言いながら銀時は、自分を取り囲んでる竜牙兵を見回す。一回りして、腰に差してある『洞爺湖』と書かれた木刀に手を構えた。

その瞬間、キャスターは銀時の雰囲気が変わったのに気づいた。杖で地面を叩いたのを合図に、複数の竜牙兵が一斉に銀時に襲い掛かった。

鋭い爪や牙、剣が銀時に届く直前、

「ぬうううん！」

銀時の腰から素早く木刀が振り抜かれ、4、5体の竜牙兵の体がバラバラに碎けて宙に散った。

「えっ！？」

一瞬の出来事に、キャスターは驚いた。

「はいイイイイ！ 次イイイイ！」

休む事なく銀時は、木刀による攻撃を繰り返す。普段の気だるさからは想像も出来ない素早い動きで木刀を振るい、次々と竜牙兵を粉々に碎いていく。銀時の剣は、お世辞にも綺麗とは呼べない。だが一撃一撃は重く、竜牙兵の体を一撃で碎き、周囲を巻き込む荒々しさは嵐のようだった。

銀時の闘いぶりを見ているキャスターの顔には、驚愕の色が浮か

んでいた。

「デ……デタラメだけど……強い！」

竜牙兵は大量に作れるが、一体一体は弱い。だから重要なのは、竜牙兵を倒していく銀時の動きだった。暗殺が専門で、真つ向勝負を避けるアサシンのサーヴァントにしては、戦闘能力が高すぎる。

——これは思わぬ当たりを引いたかもしれないわね。っていうか、何でこの男がセイバーじゃないのよ？

読者の中には、キャスターと同じ疑問を抱いた方もいると思います。その疑問に対しては、「セイバーのクラスは、既にあの騎士王が就いていて、他に空いてるクラスがアサシンだけだったんです」という答えでご納得いただきたい。

「ラストオオオオ！」

叫びながら銀時は木刀を振り、最後の一体を破壊した。

周囲には、無残に砕けた竜牙兵の破片が散らばっていた。

「よお、全部ブツ壊してやったぜ」

銀時は肩に木刀を掲げ、ニタリと憎たらしい笑みをキャスターに向けた。

予想を上回る銀時の強さに、キャスターは動揺を隠せなかった。

「あ、貴方……なかなかやるじゃない」

「まあな。魔術とやらは使えねーが、腕っぷしなら自信はあんだよ」

言って銀時は、木刀を腰に収めた。

「さあて、あの気味のワリー人形を全部ブツ壊したんだ。約束通り、朝飯用意してもらっぜ」

「わ、わかってるわよ」

少し戸惑いながら、キャストは答えた。

——私、料理出来ないのよね。

屋敷に入ったキャストは、心の中でそう呟いた。

＊

キャストの前に、新たな難問が立ち塞がった。

それは、料理。

魔術に関する事なら誰にも負けない自信があるが、ソレ以外の事はてんでダメなのである。

マズイ！ マズイわ！ 今更、料理が作れないなんて言えない。ここで銀時の機嫌を損なえば、また面倒な事になってしまうわ！ このピンチをどう切り抜けるか、キャストは必死になって考える。

キャストは知らなかった。銀時が料理を作る事を——。つまりキャストが作れなくても、材料さえあれば銀時は自分で料理を作れるのだ。

ソレを知らず、悩むキャスト！。

「ん？」

キャストの後ろを歩いていた銀時が、廊下の途中で足を止めた。

「どうしたの、銀時？」

「いや……この部屋から何か音がしたような……」

銀時の顔は、一つの部屋の扉に向いていた。

ガタツ、ガタガタ……。

音が聞こえた。

ガタガタ……。

間違いない。銀時が言った通り、音は部屋の中から聞こえてくる。

「誰か中にいんのか？」

尋ねる銀時は、扉を睨む。

するとキャスターは、「しまった」と言うように手でフードの中の顔を覆った。

次の瞬間、勢いよく扉が開かれ、中から何かが出てきた。

銀時は咄嗟に木刀に手を伸ばし、身構えた。

「ムウ！ ムウムウ！」

部屋から出てきたのは、人だった。男だ。

口には布のような物が噛ませられ、後頭部でキツく縛られて言葉を発する事が出来ずにいる。しかも両手両足を、光のロープのような物で拘束されており、身動きが取れない状態だ。男は涙目で、何かに怯えた顔をしている。

「オイ、大丈夫か？」

とりあえず銀時は、口を封じてる布を解いてやった。

「ご、ごめんなさい！ 悪気は無かったんです！ もう何にも悪口

「言いません！ 何にも言いませんから、殺さないで下さい！」

口が自由になった途端、男は急に謝り出した。

「あ？ どこかで会ったか？」

「貴方じゃないわ。私に謝ってるのよ」

銀時の後ろに立つキャスターが言った。

「アンタに？ つーかコイツ誰？」

「……私のマスターよ」

第二訓：誰にだって苦手なものはある（後書き）

キャスターのマスターの名前は、次の話で出ます。

あー、他のキャラも早く出さないと。

第三訓：何事も最後までやり抜かないとスツキリしない（前書き）

銀時召喚を報告する為、一同は新都にある教会を目指す。

第三訓：何事も最後までやり抜かないとスツキリしない

部屋から出てきたのは、キャスターによって監禁されていた彼女のマスターだった。

マスターの名前は、霧崎零寺。きりさきれいじ年齢は二十五歳。黒髪で眼鏡をかけ、銀時と似たようなダメそうな雰囲気を持っている青年。魔術師としては、まだまだ半人前なマスターだ。

監禁されていた理由は、キャスターの事を「何だよ、最弱のサーヴァントかよ」と罵ったり、他にも様々な文句ばかり言って彼女の怒りを買った事が原因である。

これには銀時も、「自業自得じゃね？」と呆れるだけだった。そして現在、銀時達は朝食を食べる為に広間に居る。

「ちよっ……！ アンタ、ソレは俺のウインナーだぞ！」

「いや違うから！ これアレだから、毒味してるだけだから！」

零寺のオカズを銀時が横取りして、騒がしい朝食を始めていた。ちなみに朝食は、銀時が作った。

「敵はどんな手段でマスターの命狙ってるか、わかんねーからな。おかわり！」

「おかわり頼んでんじゃん！ ってかサーヴァントに食事なんて必要ないだろ！」

ギャーギャーと騒ぎながらも、二人は食事を続ける。

二人の食事を見ているキャスターは、頭を抱えていた。これが、これから聖杯戦争に参加しようとしてるマスターとサーヴァントなのかと考えてしまう。

「キャスター。アンタは食わねえのか？」

銀時が一旦箸を持つ手を止め、キャスターに尋ねた。

「私はいらないわ。と言うか、そもそもサーヴァントには食事は必要無いのよ？ 貴方だってサーヴァントなのに、何でそんなにバクバク食べるのよ？」

「いや、何か気分って言うか……前はまともな飯が食えなかったから、その反動みたいなの？」

ああそう、とキャスターは小さく呟いた。

キャスターは思った。ホントに変わった男ね。ハングリーなサーヴァントなんて初めて見るわよ、と心底不思議そうに銀時を見る。

ふとキャスターは、ある事を思い出した。

「零寺」

「は、はいっ！？」

キャスターに呼ばれ、零寺はビクリと体を震わせた。この二人の主従関係は、完全に逆転している。

「貴方、教会に報告しに行った方がいいんじゃないかしら？」

「教会？」

キャスターの言葉に、銀時は片眉を上げる。

「聖杯戦争を監督してる者が、新都にある教会に居るのよ。貴方は新しく召喚されたサーヴァントだから、その事を監督役に報告するのよ」

聖杯戦争に参加した魔術師は、皆その監督役にサーヴァントの召喚を報告し、参加表明をするのだ。サーヴァントが七体揃った事と儀式の本格的なスタート時期を確かめる為である。

キャスターが教会の話をする、零寺は露骨に嫌そうな顔をする。

「はあ！？ 嫌だよ！ 俺行かないよ！ 行きませんよ！ だって、だって昼間はバイトがあるし、夜なんか他のマスターが襲ってくるかもしれないし……」

「私に口答えする気？」

重い威圧感を放つキャスターの言葉には、苛立ちの感情が混ざっていた。

「いや、でも……怖いし……」

尚も零寺は、教会に行く事を拒む。

とても聖杯戦争に参加する魔術師とは思えない、臆病ぶりである。キャスターが呆れるのも無理はない。

「そんなに怖がらなくても、ちゃんと私と銀時が護衛としてついていくわよ」

キャスターがそう言うと、零寺は少しだけ安堵の表情を浮かべた。

銀時の剣の腕前は、キャスターから既に聞いている。

「わ……分かったよ」

零寺は今夜、銀時達と一緒に教会に行く事にした。
さて、皆さんも分かった通り、マスターである零寺とサーヴァン

トであるキャスターの主従関係は逆転している。魔術師としての實力は、天と地ほどの差があり、零寺は魔術ではどうしたってキャスターに勝てない。その上、零寺はマスターの切り札である令呪を封じられている。令呪がある左手の手首に、黒いリングがつけられており、令呪を発動させようとするとリングが魔力を感知して爆発を起こし、左手をぶっ飛ばす仕掛けになっているのだ。

こうしてキャスターは、マスターである零寺を下僕として従えているのだ。

「どこの世界でも、女つてのはコエーな、オイ」

朝食を終えた銀時が、ボソツと呟いた。

*

あつという間に時間は過ぎ、夜となった。

屋敷を出て、零寺は二体のサーヴァントを連れて教会を目指した。サーヴァントは通常、霊体化となって姿を消す事が出来る。実際にキャスターは霊体化となって、姿も気配も消した状態で零寺の傍に居る。だが、一人だけ『霊体化していない』、いや、『霊体化出来ない』サーヴァントがいた。

銀時である。

霊体化のやり方が解らない銀時は、実体化したまま零寺達と一緒に行く事になった。

街灯と月明かりに照らされ人気の無い夜道を、ビクビクしながら歩く零寺。サーヴァントが護衛についていても、ヘタレな零寺は不安を拭い切れずにいた。そんな彼の後ろを歩く銀時は、呑気に欠伸をかいている。何時サーヴァントが襲ってくるか分からないという

のに、緊張感の欠片も無い。

目的地である教会は、新都にある丘の上に位置する。

途中、銀時は自分の格好も気にせず、コンビニの中に入っていた。零寺とキャスターが何事かと思っていると、銀時は雑誌コーナーへ向かった。一通り雑誌コーナーを見終わると、今度は店員に何かを聞き始めた。その後、店員の奇異な視線を受けながら銀時は出てきた。よく見ると、落ち込んでるように見える。

「ちょっと銀さん、勝手な行動しないで下さいよ」

「あ？ ああ、悪かったな」

零寺の言葉に、暗い感じで答える銀時。普段からテンションは低い、今は更に低くなっている。

「銀時？ 貴方、何を探してたの？」

霊体化してるキャスターが、パスを通じて銀時に尋ねた。

「ジャンプ探してたんだよ」

「ジャンプ？」

愛読している『ジャンプ』が無い事が分かって、銀時は落ち込んでいたのだ。

そんなやり取りもありながら、一行は教会を目指して歩く。

「ああ……ジャンプ……」

『ジャンプ』が無い事が余程ショックだったのか、たまにブツブツとこつこつ呟いている。

ふと銀時は、顔を上げて月を眺めた。聖杯を手に入れたら、『ジ

ヤンプ』を出すようにお願いでもするか？ ドリームキャッチャー
ってか？ なんて事を考えていた。

その時、月に黒い点が現れた。

「ん？」

銀時が首を傾げたと同時に、キャスターが実体化する。

「銀時！ 零寺！ 近くにサーヴァントの気配がするわ！」
「ええっ！？」

キャスターの報告を聞いた瞬間、零寺は顔を真っ青にさせた。

銀時は顔を上げたまま、月に現れた黒い点を見つめている。黒い
点が近づいてきて、段々と形が見えてきた。人影だ。人影は一行の
上を通過し、十数メートル離れた地点で着地した。

銀時達は振り返ると、そこには青い髪に青を基調とした服を着た
全身青ずくめの男が立っていた。手には血のような真紅の槍が握ら
れており、鋭い目でこちらを睨んでいる。

「テメーら、マスターとサーヴァントか？」
「ヒィィ！」

青い男の睨みを受けて、零寺は無様に銀時達の後ろに下がった。
キャスターは杖を構えて、青い男を観察する。

「槍……貴方、ランサーのサーヴァントね」
「そう言うお前のクラスは、キャスターってトコか？」

青い男——ランサーは短く笑ってキャスターと目を合わせる。
マスターの零寺には興味が無いようで、キャスターの前に立って

いる銀時に視線を移した。

「けど妙だな。サーヴァントは一人につき一体のハズだ。その白髪
の男からもサーヴァントの気配はするが、その魔術師のサーヴァ
ントなのか？」

「この男は、私のサーヴァントよ」
「何イ!？」

キャスターの言葉に、ランサーは驚きの声を上げた。
最初こそ驚いたランサーだったが、すぐに楽しそうな笑みに変わ
った。

「マジかよ。ハッ、なかなかおもしれー事するじゃねーか、キャス
ター」

「何だ何だ？ オメーもサーヴァントってヤツなのか？」

特に張り上げた訳でもない声で、銀時が聞いた。

「ああ、ランサーのサーヴァントだ。テメーのクラスは何だ？」

「俺はアレだよ、えーっと……何だっけ？」

「アサシンでしょ!」

自分のクラスを忘れ、銀時がキャスターに尋ねると怒鳴られた。

「自分のクラスも忘れるとは、ふざけた野郎だぜ」

ランサーは笑みを浮かべたまま、鋭い殺気を出した。
殺気を含んだランサーの視線を受けても、銀時は何ら動じない。

「サーヴァント同士が出会ったって事は、どういう事が解るよな？」

言いながらランサーは、両手で槍を構える。殺気のコもった槍を銀時に向け、静寂の中で仕掛けるタイミングを伺っていた。

一瞬強い風が吹いた後、ランサーが動いた。

「手合わせ願おうか！」

疾風のような速さで突進し、銀時に向かって鋭い突きを繰り出す。ソレに対し銀時は、腰から木刀を素早く抜いて、居合いの形で槍を弾く。

初撃を防がれたランサーは、一瞬驚きの表情を浮かべたが、すぐに笑みに変わった。

「よく防いだ！ 死んだ魚のような目して、なかなかやるじゃねーか！」

「男に誉められたって、全然嬉しかねーよ」

「ハッ！ おもしれー野郎だ！ 次行くぜ！」

楽しそうに笑いながら、ランサーは追撃を開始する。人間の動きを超えた速さで、槍による突きを連続で放つ。

対する銀時は、木刀でランサーの突きを防ぐ。銀時も常人の反応速度と身体能力を超えた動きで、槍を捌き続ける。

——全て弾いただと！？

木刀一本で攻撃を防ぎ続ける銀時に、ランサーは内心驚愕した。

最速のサーヴァントたるこの俺が、攻めきれないだと！？ この男、本当にアサシンなのか！？

クラスに合わない銀時の強さに、ランサーは彼がアサシンである事に疑問を抱く。だが、それ以上にランサーは、この闘いを楽しんでいた。確かに目の前にいるサーヴァントは変わっているが、それも含めて銀時との闘いを楽しんでいる。

「……」

一方、離れた所で闘いを静観しているキャスターと零寺は、一言も声を発する事が出来なかった。

見惚れていた。キャスターは銀時の強さに、零寺は初めて見るサ―ヴァント同士の闘いに――。

銀時の強さは、竜牙兵如きで測れるモノでは無かったとキャスターは気付いた。完全にアサシンの強さを超えており、その剣の腕はセイバーのクラスに匹敵する。

さつきまでビビりまくっていた零寺は、目の前で繰り広げられる闘いに見惚れて、いつの間にか体の震えが止まっていた。

「いいぞ！ もっと、もっとだ！ もっと俺を楽しませろ！」

「チツ。バトルマニアかよ、テメーは！」

闘いが激しくなっていく、ランサーの気持ちも高ぶってきた時だった。

「っ！」

突然ランサーの動きが止まり、後ろへ下がって銀時から距離を離れた。

銀時が目を細めると、ランサーは不機嫌そうに顔を顰めた。

「チツ。ワリーな、この決着はまた今度だ」

ランサーは殺気を消して、銀時に背を向けた。

「逃げるのかしら、ランサー？」

「不本意だが、マスターの指示でな。オイ、銀髪！ 機会があれば、今度こそ全力で殺り合おうぜ！」

キャスターの問いに答え、銀時に再戦を約束して高く跳躍する。そのまま建物の屋根を飛び移りながら、ランサーは去っていった。銀時達は、ランサーが去っていったあとを見つめていた。

「何だったんだ、アイツ？」

「多分マスターの指示で、諜報活動をしていたのよ」

「諜報ってお前……あんな全身青タイツじゃ、目立ちまくりじゃないか」

木刀を腰に収めながら、銀時が言った。

「ったく。ホラッ、とつと教会に行こうぜ」

「……え？ あっ、はい」

闘いに見惚れて呆然としてた零寺は、銀時の声でハッと我に帰った。

ランサーとの戦闘を終えた一行は、再び教会を目指して歩き出した。

*

しばらく歩くと、交差点が見えてきた。

そこでキャスターが、また何かを察知して足を止めた。

「二人とも気を付けなさい。またサーヴァントの気配がするわ」

「またかよ」

前方をよく見ると、交差点の中心辺りに三人の人影があつた。

一人は、赤茶色の髪をした高校生くらいの少年。二人目は、黄色い雨ガッパを着て顔をスッポリと隠しているので、性別は判らない。三人目は、黒髪をツインテールにした少年と同一年くらいの少女。交差点の真ん中で、何やら話し込んでいる様子で、銀時達には気付いてない。

「どうすんだよ？ 向こうに気づかれないように、無視して行くのか？」

ヒソヒソと小さな声で、銀時が二人に意見を求めた。

「魔術師は二人。あの雨ガッパを着てるのが、おそらくサーヴァントね。それと魔術師は二人いるから、もう一体サーヴァントが霊体化して待機してる可能性があるわ」キャスターが素早く状況を分析する。

「数は向こうの方が上。ここは一旦退いて、出直した方がいいんじゃない……」

「それか遠回りするかだな」

出直すか遠回りにするか、三人が話し合う。

場所移動もせずに話し合っていると、

「マスター！ すぐ近くにサーヴァントの気配がします！」

「何だつて！？」

向こうが銀時達の存在に気付いてしまった。

「ヤベツ！ バレた！ お前がデケー声出すからだぞ！」零寺に怒鳴る銀時。

「いや、アンタの声でしょ！」銀時に怒鳴り返す零寺。

「ええい、二人共うるさい！」怒鳴りながら、二人に拳骨をお見舞いするキャスター。

「いや、オメーの声が一番うるさい！」

最後に銀時と零寺の声が重なり、夜の町に響いた。

「マスターは退がって下さい！」

雨ガッパを脱ぎ捨て、中から美しい少女が姿を現した。金色の髪を青いリボンで後ろに結び、青いドレスの上に立派な銀色の甲冑を身に纏い、いかにも騎士といった格好をしている。顔も意思の強そうな、凜とした表情をしていた。

「ま、待て、セイバー！ 向こうに闘う意思があるかも確認しないで、いきなり襲い掛かるのはダメだ！」

赤茶色の髪の少年が、セイバーと呼ぶ金髪の少女を止める。

「ですがマスター、彼等は敵マスターとサーヴァントです」

「ちよつと待って！」

セイバーが異議を唱えると、ツインテールの少女が待ったをかけた。

「何で魔術師が一人なのに、サーヴァントが二体も居るのよ！」

納得いかないと言った感じで、ツインテールの少女が声を上げた。

「あ？ いい、いい。そういうリアクションは、さっき青タイツがやったから。もう充分見たから」

「何よ、その態度は！ サーヴァントは一人につき一体と決まってるのよ！ どんな反則したらサーヴァントが二体になるのよ！」

「と、遠坂！ とりあえず落ち着け！」

銀時のふてぶてしい態度に、ツインテールの少女——遠坂凜が怒り、隣にいる赤茶色の髪の少年がなだめる。

この時キヤスターは、周りに苦勞してる少年を見て同情していた。

「あの……アンタ達は、今は闘う意思はあるのか？」

凜を落ち着かせた後、少年が銀時達に戦意があるか尋ねた。

「いや。俺達は教会に行くだけだ」

「教会に？」

「ああ。俺が召喚された事を、監督役とやらに報告しに行くんだよ。メンドクセーけどな」

心底メンドクさそうに、銀時は少年に語る。

「そうか。なら、今は闘う気は無いんだな？」

「ええ。まあボウヤ達が闘る気なら、相手になるけど？」

銀時の後ろに立つキヤスターが言った。

「いや、俺も闘う気は無い。俺は、無関係の人達を巻き込むマスターを止める為に、聖杯戦争に参加したんだ。アンタ達が悪い奴らじゃないなら、闘う必要は無い」

そう言う赤茶色の髪の少年——衛宮士郎は、何となく銀時達は悪人ではないと思った。

「ちょっと衛宮君。まだ会って五分も経ってないのに、どうしてアイツらが悪人じゃないって解るのよ？」

「いや、その……何となく、かな？」

目を細めて迫ってくる凜に対して、士郎は苦笑を漏らす。

士郎の言葉を聞いた凜は、彼の甘い考えに怒りを通り越して、呆れて溜め息をついた。

「……はあ。もういいわ。私のアーチャーも、セイバーにやられて今日はもう闘えないし……。戦闘にならないなら、それに越した事はないわね」

とりあえずは、凜も警戒を消してくれた。

士郎が凜の言葉に、ホッと胸を撫で下ろした時だった。

「——ねえ。もうお話は終わりがしら？」

冷たい夜に溶け込むような、酷く冷えた声が夜道に響いた。

全員が一斉に、声がした方へ顔を向けた。

そこには、見てはいけないモノが立っていた。

夜を照らす光輝く月の下に、ソイツは居た。

第三訓：何事も最後までやり抜かないとスツキリしない（後書き）

次回、最凶のサーヴァントと対決！

そして銀時の反則的な能力が発動！？

銀時「俺を常識という檻に閉じ込めるのは諦めな」

キャスター「それ、自分は人間失格ですって言ってるようなものよ？」

第四訓：銀と万事屋の鬼退治（前書き）

現れるのは、最強のサーヴァント！

そして、まさかの“あの能力”が復活！？

第四訓：銀と万事屋の鬼退治

ソイツを見た瞬間、士郎や凜はまるで金縛りにあったかのように、体が動かなくなった。

目を一杯に見開き、見てはならないのに、目をそらす事が出来ずにいた。恐怖のあまり、呼吸をする事すら忘れてしまう。

明らかに他のサーヴァントとは異質——いや、次元が違う。山のようにな大きな体格、鋼のような強靱な肉体、視線だけで人を射殺せそうな不気味な瞳。手には巨人が使うに相応しい、岩の塊のような大剣が握られている。他を押し潰しそうな程の威圧感に、圧倒的な“死の気配”を纏っていた。

死を司る魔神を見た士郎の頭の中に、あるサーヴァントのクラスが思い浮かんだ。

——バーサーカー。

目の前に立つサーヴァントは、まさに狂戦士と呼ぶに相応しい禍々しい風貌をしている。

士郎達の様子を見て、クスクスと笑う少女がいた。

「どう？ コレが私のサーヴァント・バーサーカーよ」

巨人——バーサーカーの前に立っている少女は、自慢気に言った。雪のような白い長髪、血のように真っ赤な瞳をした幼い少女。

この少女が、バーサーカーと呼ばれる巨人のマスターのようだ。少女は、着ている紫のコートの裾を掴み、士郎達に丁寧なお辞儀をする。まるで何処かのお姫様のように、可愛らしく見えた。

「はじめまして。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えば解るかしら？」

「アインツベルンですって!？」

イリヤの名を聞いた凜は、驚きの声を上げて身構えた。

「し……知ってるのか、遠坂？」

何とか声を振り絞り、士郎は凜に尋ねた。バーサーカーを前にしては、声を出す行為さえ大変だった。

「……アインツベルン。聖杯入手を宿願とする魔術師の家系で、毎回この闘いにマスターを送り込んできてるヤツ等よ」

「え……？ それじゃあ、あんな小さな子がマスターなのか？」

信じられないと言った顔で、士郎はイリヤを見た。士郎の目には、イリヤはどこにでも居る普通の少女に見えていた。

「そつだよ、お兄ちゃん」

士郎の呟きに、イリヤはニコツと笑って答えた。

「だけどね、わたし聖杯よりも楽しみにしていた事があるの」

ダンスでもするかのように、イリヤは楽しそうにクルッと一回転した。

「それはね、お兄ちゃんを殺すこと」

笑みを浮かべる少女の目が、突然、氷のような冷たい殺気の宿った目になった。

「えっ!？」

とても幼い少女が放つとは思えない殺気に、士郎は思わず後ずさった。

——俺を知ってる！？　だけど、どうして……？

イリヤとは、一度会った事がある。学校から家に帰る途中、道端で出会ったのだ。

その時に、イリヤは士郎にこう言った。

——早く喚ばないと死んじゃうよ。

アレは、サーヴァント召喚の事を言っていたのだ。

しかし、士郎の中にある疑問は解けなかった。イリヤは、もつとずっと前から士郎を知っているみたいなのだ。だが士郎には、道端で会った時以外に覚えが無い。

「けどその前に……他のマスターとサーヴァントを片付けないとね」

イリヤの視線が、士郎から近くににいるキャスター達に向けられた。

「くっ！」

表情を陰しくさせ、キャスターは杖を構える。

バーサーカーから感じる魔力と威圧感は、先ほど遭遇したランサーとは桁違いだ。同じサーヴァントでもここまで違うものなのかと、キャスターはバーサーカーを睨む。

あの化物をどう退けるか、キャスターが考えていた時だった。

「ぐふっ」

突然、銀時と零寺が口から血を吐き、バタリと道に倒れたのだ。キャスターを含む全員が、目を細めて倒れた二人を見る。

銀時と零寺は、倒れたままピクリとも動かない。

——俺は何にも関係ありませえん！ ただの腐った死体です。食ってもおいしくありません、だから放っておいて下さい！

——銀さああん！ サーヴァントに死んだフリって、通用するの？ 聞いた事ないんだけどオオオ！？ 大丈夫なのかよ、コレ？ バーサーカーを見てビビった銀時と零寺は、死んだフリ作戦に出たのだ。

死んだフリをしてる二人を、周りの皆は呆れた顔で見下ろしていた。

「……ちよつと銀さん。周りの視線が痛いんだけど……俺達、ひよつとして馬鹿やってません？」

「……」返事が無い。ただの屍のようだ。

「あつ、ズリーぞ！ 一人だけ本格的に死んだフリしやがって！ バーサーカー様ア！ コイツ生きてますよ！」

零寺が頭を起こして叫んだ直後、銀時が腕だけ動かして零寺の頭を叩いた。

「見ろ！ 今動いた！ 俺の頭叩きやがったぞ！」

声を荒げる零寺。

すると銀時が顔を上げ、腕を伸ばして零寺の髪を掴んだ。

「うるせーんだよ、ガタガタ騒ぐなクソガキ。心頭滅却して死んだフリすれば、サーヴァントにも心通ずるんだよ。さっさと目を瞑れ」
「わかったよ。おやすみ、銀さん」

二人がどうでもいいやり取りをしていると、それを見ていたイリヤが笑い出した。

「あはははは！ 変なサーヴァントとマスター。バーサーカー、先にあの倒れてる二人をやっちゃえ！」

「■■■■■■■■■■」

イリヤの命令を受け、バーサーカーが夜空に向かって吠えた。大気を震わせるバーサーカーの咆哮は、死刑執行の合図に聞こえた。

バーサーカーは片手で軽々と大剣を振り上げ、まだ道で倒れている銀時と零寺を潰そうと勢いよく振り下ろす。

「うおわっ！」

咄嗟に銀時と零寺は起き上がり、大剣から逃げた。

振り下ろされた大剣は硬いアスファルトを砕き、凄まじい剣圧によつて瓦礫を吹き飛ばす。何とか攻撃を避けた銀時と零寺も、衝撃を受けて飛ばされてしまう。

「銀時！ 零寺！」

すぐさまキヤスターが駆け寄った。

涙目で零寺が顔を上げた。

「な……何なんだよ、アイツ！？ あんなサーヴァントがいるなんて聞いてねーぞ！」

「アレのどこが英雄だ！ どっちかつつーと化物じゃねーか！」

銀時も起き上がり、青ざめた表情で叫んだ。

二人が騒いでる間にも、再びバーサーカーは大剣を構えて迫ってくる。

「零寺！ 貴方は早く逃げなさい！」

「いや無理！ ここ、腰が抜けて立てない！」

「ああもう！ ホント情けないマスターね！」

マスターの愚痴を言いながら、キャスターは杖の先端に紫色の魔力を溜める。

複数の魔力弾を生成し、バーサーカーに向けて一斉に放った。紫色の魔力弾は、巨体のバーサーカーに全弾命中する。爆音と共に発生した爆煙が、バーサーカーの姿を隠した。

「やったか？」

煙を見つめて、銀時が呟いた。

キャスターは何も言わず、黙って煙を睨んでいる。

煙が晴れていき、中から無傷のバーサーカーが姿を現した。

「そんな……！ かすり傷一つ無いなんて！」

キャスターの魔術を受けて無傷のバーサーカーに、魔術師である凜は驚愕する。

その反応を見て、楽しんでいるかのようにイリヤがクスクスと笑う。

「無駄よ、キャスター。バーサーカーには、一定ランク以上の魔術でないと効かないわ」

「くっ！」

イリヤの言葉とバーサーカーの驚異的なタフさに、キャスターは悔しそうに歯噛みする。

「バーサーカー！ ソイツ潰しちゃえ！」

標的をキャスターに変更し、イリヤが命令をした。

バーサーカーは咆哮で応え、上段から大剣を振り下ろしてキャスターを潰そうとする。

あの圧倒的な破壊力には、自分の魔術の防御など無意味だと悟った。迫り来る死を感じながら、キャスターは覚悟を決めた。その時だった。

「うおおおおお！」

キャスターの前に銀時が現れ、木刀を頭上に構えて防御の体勢を取り、上から振り下ろされたバーサーカーの一撃を受け止めた。生身で大砲を受け止めたような衝撃が木刀を通じて全身に走り、アスファルトが陥没して足がめり込んだ。

自分を護る銀時を見て、キャスターは驚きの声を上げた。

「銀時！」

「銀さん！」

零寺も、銀時の背中を見て叫んだ。

「ぐおおおおお！」

銀時は腕だけでなく全身に力を入れ、押し潰そうとしてくるバーサーカーの怪力に必死に逆らう。歯が砕けそうな位に食いしぼり、目を一杯に開き、一瞬でも気を緩めないよう踏ん張る。

——野郎、なんつー馬鹿力だ！ こいつア、下手したら鳳仙並に厄介かもしれねーな！

巨人の大剣を受け止めてる銀時の脳裏に、ある男の姿がよぎった。
やあう・ほうせん
夜王・鳳仙。銀時が住んでいた世界の天人。かつて宇宙最強の戦

闘民族・夜兎族の中で一大勢力を築き上げ、夜兎の頂点に君臨し、夜を統べる“夜王”と呼ばれ恐れられていた。その実力は、宇宙最強のえいりあんハンターであり、神楽の父親である星海坊主つみほつすと並び称され、生身でサーヴァントの域に達する程である。

バーサーカーの一撃を止めた銀時を見て、イリヤが感心したように笑った。

「へえ、私のバーサーカーの一撃を止めるんだ。やるね、お兄さん。だけど私のバーサーカーには勝てないわ。だってソイツは、古代ギリシャ最大の英雄——ヘラクレスなんだから！」

「ヘラクレスですって!？」

「見た時から、薄々気付いてはいたけど……まさか本当にヘラクレスとはね……!」

イリヤが明かしたバーサーカーの正体に、凜は驚き、キャスターは予想が的中して表情を陰しくさせた。

「サーヴァントの強さは、その世界での認知度に強く影響されるわ。ゆえに、この世に広く名が知れ渡った英雄ほど、その力は強大になる。だから、ヘラクレスに敵う者なんていないのよ!」

絶対の自信を持って、イリヤが断言した。

確かにヘラクレスと言えば、知らぬ者のいない大英雄。理性と引き換えに強大な力を得るバーサーカーのクラスに、人々に広く知れ渡っているヘラクレスは、まさに最強のサーヴァントである。

「バーサーカー! ソイツ潰しちゃえ!」

イリヤが声をかけると、バーサーカーは空いている左手で銀時を殴り潰そうと拳を放つ。

銀時が舌打ちし、拳が当たる直前、

「はあああああ！」

叫び声と共に、バーサーカーの左拳が何者かによって上に弾かれた。

「うおおおおお！」

この際に銀時は、足元に転がってる大きめな破片をバーサーカーの顔目掛けて、思いっきり蹴飛ばした。

バーサーカーは咄嗟に大剣で破片を砕き、銀時はキャスターと零寺を連れて離れた。

「オメーら大丈夫か？」

「え、ええ」

「ああ、死ぬかと思った！ 小便漏らすかと思った！」

キャスターは頷き、零寺は涙と鼻水で顔をグシャグシャにして叫んだ。

「どうやら、三人とも無事そうですね」

横から声が聞こえ、銀時達は一斉に顔を向けた。

そこには、何も持っていないのに剣の構えをしているセイバーの姿があった。先ほどバーサーカーの拳を弾いたのは、他でもないセイバーだったのだ。

「ああ、まあな。ついがお前、何で俺らを助けたんだ？ 敵同士なんだから、放っておいてもいいだろう？」

「確かに貴方達とは、いずれ闘う事になります。ですが今、貴方達を見捨てる事は私のマスターが許しません」

「お前のマスターが？」

銀時は片眉を上げ、セイバーのマスターである土郎を見た。

危険な目に遭っている人を放っておけない土郎は、セイバーに銀時達を助けるよう頼んだのだ。

「それにバーサーカーは、私のマスターを狙っています」

「そうかい。つまりあのデカブツは、共通の敵って訳だな」

確認するように言うと、銀時は木刀を構えた。

仲間ではないが、二人の中で共通の思いがあった。

自分が護るべきモノを護る。

銀時の死んだ魚のような目が別人のように鋭くなり、セイバーも強い意思の宿った瞳でバーサーカーを見据えていた。

「いくぜ！」

「はい！」

二人は同時に駆け出し、バーサーカーに向かっていく。

侍と騎士の共闘が始まった。

バーサーカーが吠えながら、叩き潰す事を目的としたような大剣をセイバーに向かって振り下ろす。

セイバーは“何も持っていない両手”を上げ、バーサーカーの大剣を受け止めた。巨大な剣は、何も無いセイバーの頭上で火花を散らせて止まっている。彼女は“武器を持っていない”のではなく“武器を見えなく”しているのだ。セイバーのクラスの通り、不可視の武器の正体は西洋の剣である。

「くっ……！」

力負けして、セイバーは少し押されてしまう。

その隙に銀時がセイバーの頭上を飛び越え、バーサーカーの顔の前に出る。

「うおおおお！」

両手で木刀を持ち、気迫と共に上段から思いっきり振り下ろす。

木刀はバーサーカーの頭に直撃し、大きな打撃音が夜に響いた。

続いてセイバーも大剣を捌き、バーサーカーのから空きの胴に不可視の剣を叩き込んだ。

二人の強烈な一撃を受け、それでもバーサーカーは止まらない。

銀時の一撃はほとんどダメージが無く、セイバーの剣もバーサーカーの体にかすり傷をつける程度だった。バーサーカーは力任せに大剣を振り回し、銀時とセイバーは剣撃を避ける。疲れを知らないバーサーカーは、攻撃の手を休める事なく攻め続ける。バーサーカーの剣は、剣術の基本を無視した力任せの単純な攻撃だった。しかし、その一撃はあらゆる物を粉碎する威力を持ち、直撃すれば“死”へと繋がる凶刃。バーサーカーが大剣を振れば、塀は砕け、電柱は折れ、車は真っ二つに斬れた。全てを破壊し、魂を押し潰そうとする大剣の攻撃を銀時とセイバーは耐えていた。

超人的な反応速度と勘を働かせて銀時は避け、セイバーは全身に纏わせた魔力をバネにしてこれ以上ないというタイミングとスピードで捌き、バーサーカーの嵐のような攻撃を凌いでいる。

だが、戦況は厳しいもので、二対一でも銀時達はほとんど防戦一方となっていた。キャスターと凜の援護射撃が放たれるが、バーサーカーには通じない。

「セイバーの剣が通じない相手に、私達の攻撃は効かないか」

少し悔しそうに呟いた後、凜は攻撃の手を止めて次の手段に出た。

『アーチャー、用意はいい？』

パスを通じて凜は、自分のサーヴァントに連絡を取る。

「ああ、いつでも構わん」

銀時達が闘っている場から遠く離れたビルの上屋に、一人の男が弓を構えて立っていた。白く短い髪、肌は褐色で背は高く、ガッシリとした体格に赤い外装を身に纏っている。彼が遠坂凜のサーヴァント——アーチャーである。

矢を持つて弓を構えるアーチャーは、遠く離れたバーサーカーに狙いを定めた。

「だが凜、セイバーから受けた傷はまだ癒えていない。狙撃は一射が限度になるぞ」

『上等！』

アーチャーの返事に頷く凜。

銀時達と闘っているバーサーカーが、口を大きく開けて吠えた。

その瞬間、アーチャーの手から矢が放たれた。鷹の目を持ち、アーチャーのクラスに恥じぬ正確さで発射された矢は、狂う事なく一直線にバーサーカーへ向かって宙を走る。

放たれた矢は、見事にバーサーカーに命中した。

アーチャーが狙ったのは、大きく開かれたバーサーカーの口だった。射撃が一発限りの状態で、バーサーカーに有効なダメージを与えられるポイントは、硬い皮膚に覆われていない口だけだった。

「よし！ やった！」

期待通りのアーチャーの働きに、凜がガッツポーズを取る。

だが、その喜びはすぐに打ち砕かれた。

バーサーカーは、刺さった矢を粉々に噛み砕き、地を揺るがすような咆哮を上げた。そして何事も無かったかのように、再びバーサーカーは銀時とセイバーに襲いかかった。

「嘘！？」

「あはははは！ 残念だったわね。バーサーカーには、そんな作戦通じないわよ！」

凜の驚く顔を見て、イリヤは面白そうに笑う。

そして闘いが続く中で、セイバーに異変が起きた。僅かに動きが鈍っていき、今まで以上に押され始めてきた。実は銀時達と出会う少し前、士郎の屋敷の庭でランサーと闘っていたのだ。その時に、呪いの槍で体を貫かれており、その傷がまだ完全に癒えていないのだ。

万全の状態でないセイバーは、苦しい表情でバーサーカーの剣を捌き続ける。激戦の中、セイバーは傷の痛みで一瞬だけ隙を作ってしまう。ソレをバーサーカーが見逃すハズが無く、銀時を無視してセイバーに大剣を振るう。大気を切り裂き迫ってくる大剣を、セイバーは何とか不可視の剣で防御するが、衝撃に耐えきれず後方へ吹き飛ばされ、塀に衝突してしまった。ガラガラと塀が崩れ、セイバーが衝突した所は煙に包まれる。

「セイバー！」

士郎がセイバーの名を叫ぶ。

煙の中から、セイバーの姿が見えてきた。頭や口から血を流し、

銀の鎧も傷付いている。

「マ……マスター……逃げ、て……！」

傷付いた自分よりもセイバーは、マスターである土郎の安全を優先し、逃げるよう伝えた。

「バカッ！ お前を置いて逃げれる訳ないだろう！」

セイバーの考えに怒り、土郎は怒鳴った。

バーサーカーには、何をやっても通用しない。セイバーの剣も遠坂の攻撃も通じない。他のサーヴァントの攻撃も弾かれた。ハッキリ言って、勝ち目なんて無い。けど、だからってセイバーを見捨てるなんて出来ない。

感情が高ぶり、土郎は拳を強く握った。

セイバーが何か言おうとした時、バーサーカーが彼女の前に立ち塞がった。トドメを刺す為に、大剣を振り上げる。

その時、土郎の中の理性が吹き飛び、弾かれたように走り出した。何も考えず、ただがむしゃらに走る。

遠坂が何か言っているが、構わず走り続けた。

ボロボロの彼女を巨人から護ろうと、手を伸ばした。

セイバーが驚いた顔で、こちらを見た。

あと少し、もう少しで届く。

だが、土郎の手がセイバーに届く前に、無情にもバーサーカーの大剣が振り下ろされた。このままでは、二人とも殺されてしまう。全員が最悪の結果を予想した時だった。

「待て待て待て待て待てエエエエ！」

一人の男が間に入り、両手に持つ木刀を力一杯振るってバーサー

カーの大剣を弾いた。

「えっ!？」

セイバーの元まで辿り着いた土郎は、振り返ってその人物を見た。助けに入ったのは、銀時だった。

「バカヤロー! 死にてえのか、クソガキ!」

銀時も振り返り、土郎の顔を見て怒鳴った。その顔には、明らかに怒りの感情が表れている。

「ちが……! 俺はただ、セイバーを助けようと……!」

「うるせー! 俺が来なかったら、テメーおっ死んでたぞ! テメーが死んだら、サーヴァントのセイバーはどうなるんだ!」

「そ……それは……」

銀時の迫力に圧され、土郎は口ごもってしまふ。

死ぬつもりなど無い。ただセイバーを助けたかった。本当なら、もっと上手くやるハズだった。

頭の中で幾つか言葉が浮かんだが、どれも口に出せなかった。目の前に立つ銀時は、有無を言わせぬ迫力を放っているのだ。

「オメーのセイバーを護りたいって気持ちは間違っちゃいねーよ。けどな、自分の命を捨てて護ったところで、残されたヤツは本当の意味で救われやしねーんだよ」

厳しい銀時の言葉に、土郎は何も言い返せなかった。

「バーサーカーの前で説教なんて、随分余裕だね、お兄さん」

イリヤの声でハツとなり、銀時と士郎はバーサーカーへ顔を向けた。

バーサーカーは大剣を振り上げ、既に攻撃体勢に入っていた。

「逃げる！」

銀時の声を受け、一瞬戸惑った士郎は、セイバーを抱えて走り出した。

同時に大剣が振り下ろされ、残った銀時は横に跳び、ギリギリでコレをかわす。

地を思いつき蹴り、銀時はバーサーカーの顔の前まで跳躍した。

「ナメんな、デカブツウウウ！」

木刀を横薙ぎに振りぬき、渾身の一撃をバーサーカーの顔に浴びせる。

銀時の一撃を受け、バーサーカーの巨体が初めてグラついた。

周りにいる一同は驚き、イリヤも少し目を見開いた。

だがダメージは与えていても倒すまでには至らず、バーサーカーは体勢を立て直して、お返しとばかりに大剣を横薙ぎに振るった。咄嗟に銀時は木刀を盾代わりにして、重い一撃を防ぐが、衝撃に耐えきれず木刀を弾かれ、手から離れてしまう。銀時自身も十数メートル飛ばされ、倒れてしまった。

「銀時！」

キャスターが叫んで、倒れた銀時に駆け寄る。

「バーサーカー！ その二体のサーヴァントを、先にやっちゃいな

さい！」

イリヤが容赦無くトドメを刺すよう命じ、バーサーカーは雄叫びを上げて銀時とキャスターに迫る。

「ヤ……ヤバイ！ 二人とも逃げろオオオ！」

腰が抜けて動けない零寺は、声を振り絞って叫んだ。

キャスターは悔しそうに歯噛みし、忌々しげにバーサーカーを睨む。銀時とセイバーの剣撃、キャスターと凜の魔術、アーチャーの狙撃が通用しない化け物。銀時は木刀を弾かれて丸腰の状態になり、絶望的な状況になっていた。

絶体絶命のピンチの中で、キャスターが諦めた時だった。

「……ふふふ」

不意に、銀時が笑い出した。

キャスターが不審に思っただけで顔を覗くと、銀時は不敵な笑みを浮かべていた。

「まったく。テメーら、んなトコにいたのかよ」

呆れたような、それでいて少し嬉しげに銀時は独り言を言った。首を傾げるキャスターの前で、銀時は立ち上がった。

何の武器も持たずに、銀時はキャスターの前に出て迫り来るバーサーカーを見据える。

カッと目を見開き、銀時は叫んだ。

「ファーストスタンド 第一英霊、アイアンガール！」

直後、銀時の額に『神』という字が現れた。

バーサーカーは銀時の変化に構わず、大剣を勢いよく振り下ろす。誰もが二人の死を想像した時、信じられない事が起こった。圧倒的破壊力を誇る大剣を、銀時は素手で受け止めたのだ。

「えっ!？」

その場に居る全員が、目を見開いて驚きの声を上げた。

さすがのイリヤも、バーサーカーの一撃を素手で止められて、目を丸くしている。

だが、驚くのはまだ早かった。

更に信じられない事に、受け止めた大剣ごとバーサーカーを押し始めたのだ。先ほどまでバーサーカーの怪力に苦戦していた銀時が、今は力勝負でバーサーカーを圧倒している。

「きゅ……急激に魔力を増大させた!? 一体これは……!？」

マスターであるキャスターは、銀時の膨れ上がった魔力にいち早く気付いた。

すると銀時は、伏せていた顔を上げた。

「ブワハハハハ! お前を薬局にある、ユ○ケルのあのちよつと古いタモさんのパネル人形にしてやろうかア!」

笑っている銀時は、何故か可愛い女の子の顔と声に変わっていた。瞳の色は青く、髪は少し逆立ち、身長が少し縮んでいる。

「えええええ!?! 銀さんが女の子になったアアアア!?!」

銀時の変化に、零寺は目が飛び出そうな勢いで驚き、シャウトし

た。

「って言うか、力勝負であのバーサーカーに勝ってるわよ！ どん
なってるのよ、アイツ！？」

理解不能な現象に、凜は額に青筋を立てて声を荒げた。

『銀魂』読者の方なら、銀時の変化はもうお分かりでしょう。

そう、銀時は『スタンド使い』としての能力を発動させたのだ。
知らない方の為に説明しましょう。スタンド使いとは、スタンド（
幽霊）を手足のように使い、更には己が身にスタンドを憑依させ、
意識を支配される事なくその強大な力を操る者なのだ。

今、表に出てるスタンドは、神楽。しかも今回は、サーヴァント
である銀時と神楽の魂が融合して、二人の実力が合わさり、通常の
スタンド能力時よりも力が上がっている。サーヴァントの常識やル
ールを破る、まさに反則技。

体の主導権を得た神楽は、バーサーカーの大剣から手を離れた。

「ほオオオオあたアアア！」

神楽はがら空きになっているバーサーカーの腹に、強烈な回し蹴
りを食らわせた。

蹴りを受けたバーサーカーは、受け身も取れずに塀に叩きつけら
れる。

「なっ！？」 あの大巨体のバーサーカーを、ただの蹴りで吹っ飛ばし
た！？」

神楽のメチャクチャな強さに、士郎は驚愕した。

先ほどまでの戦況を考えれば、当然の反応である。

士郎の傍に居るセイバーも、自分の目を疑っていた。
瓦礫の中から、バーサーカーが起き上がった。

「セカンドスタンド第二英霊、ジャイアントドッグ！」

神楽が叫ぶと、額の文字がルーレットのように回転し、『定』という字が表示された。

すると、また体に変化が起こった。髪型は戻り、目は大きな黒目となり、口から立派な牙が生え、腰の辺りには真っ白な尻尾がフリフリと動いている。

「ワンッ！」

今度のスタンドは、定春のようだ。

「何で犬なのよ！」

定春が吠えた直後、凜がツツコんだ。

バーサーカーは大剣を振り上げ、定春に襲い掛かる。が、四足歩行の獣体勢に入った定春は、俊敏な動きと動物の勘でバーサーカーの剣撃を避ける。しかも元の体よりも小さい為、大振りのバーサーカーの攻撃を軽々とかわしていた。隙あらば定春は、バーサーカーに頭突きや突進を食らわせた。元の体より小さいが、スタンド能力でパワーは上がっている。

「何やってるのよ、バーサーカー！ そんなふざけたサーヴァント、早く殺しなさい！」

イリヤが苛立ちの混ざった声で、バーサーカーに命令した。
バーサーカーは反撃の剣撃を繰り出すが、定春は見事な跳躍で避

け、後方へ下がって間合いを取った。

「ワンワンッ！（トドメをくれてやる！）　ワォーン！　ワンワン
！（行けー！　第三英霊ジミー・ヘヴンリーー！）」
サイドスタンド

また額の文字が回転し、『新』という字へと変わった。
元の銀時の姿に戻り、眼鏡をかけた状態になった。

「いや、おかしいだろオオオオ！　何で僕だけ眼鏡なんだ！？」

変化して即座に、新八はシャウトした。

「え？　何？　何かおかしいか？　合ってるだろ、コレで」と鼻を
ほじる銀時。

「明らかにおかしいだろ！　神楽ちゃんや定春の時は、ちゃんと顔
とかに目立つ変化があったのに、何で僕だけ眼鏡なんだよ！　変化
が眼鏡だけって、薄すぎだろオオオオ！」

悲しいかな、地味な新八の特徴は眼鏡しかないのである。

新八が自分の扱いの酷さにツツコンでると、ズンズンと足音が近
づいてきた。

恐る恐る前を見ると、バーサーカーが新八に向かって大剣を振ろ
うとしていた。

慌てて新八は防御しようとしたが、気付いた時にはもう遅く、大
剣は新八にヒットした。

「何で僕だけエエエ！？」

哀れ新八君、全く活躍しないまま塀に衝突してしまった。

やられた銀時（新八）は、崩れた瓦礫の山の中に埋まってしまふ。

「ぎ……銀時！」

キャスターは一瞬、銀時と呼ばばいいのか他の名を呼ばばいいのか迷ったが、他の者の名は知らないで、最終的に銀時の名を叫んだ。瓦礫の中の銀時に反応は無いが、ラインを通じて存在を感じるので、消えてはいない。

彼が生きている事に、キャスターはとりあえず一安心した。

だが、安心したのも束の間、バーサーカーが確実なトドメを刺そうと大剣を上段に構える。

しかし、その一撃が放たれる事は無かった。

「うおらああああ！」

瓦礫を吹き飛ばし、銀時、新八、神楽、定春が中から飛び出てきた。

銀時の手には、さっき手放してしまった木刀が握られていた。実はちょうど吹っ飛ばされた場所が、木刀が転がっていた所だったのだ。

勢いを殺さず、銀時と新八は木刀を振るい、神楽は飛び蹴りを繰り出し、定春は頭突きを放つ。三人と一匹の同時攻撃は見事に決まり、バーサーカーの巨体を軽々と吹っ飛ばした。バーサーカーは大きな地響きを鳴らし、地面に倒れた。

キャスター達は、啞然とした顔で固まっている。

「な……な……何でサーヴァントの数が、増えてるのよオオオオ！？」

周りの状況など関係なしに、凜は怒りを爆発させた。サーヴァントの範疇を越えすぎて、怒りを感じずにはいられなくなったのだ。

「へえー、本当に変わったサーヴァントだね」

二回もバーサーカーを地に倒し、サーヴァントの数を増やした銀時にイリヤは驚きながらも興味を抱いた。

「お兄さん達、何者なの？」

「何者だ？ 仕方ねえ、そんなに知りたきゃ教えてやるぜ！」

イリヤの問いに対し、銀時は笑みを浮かべて言った。

「家事手伝いから、人探しまで何でも御座れ！」

「困った事があつたら、ここに来るアル！」

「一事が万事！ 金さえ払えば何でもやるよ！」

新八、神楽、銀時の順に答え、

「万事屋銀ちゃんとは、俺達の事だ！」

「ワン！」

三人で声を揃え、最後に定春が一声吠えた。

冬木市に、万事屋メンバーが勢揃いした。

第四訓：銀と万事屋の鬼退治（後書き）

遂に冬木の地に、万事屋メンバーが揃った！

バーサーカーとの闘いの結末は！？

どうなる聖杯戦争！？

第五訓：人の心に深入りしない（前書き）

（設定話）

実は、この小説を執筆する少し前までは、神楽をバーサーカーにするつもりでした。それが、万事屋全員をバーサーカーで召喚という設定を考えてました。

ぶっちゃけ、銀魂のキャラってみんなバーサーカーだと思うんですよ。新八も寺門通の事となると豹変するし。

第五訓：人の心に深入りしない

たった一つ、たった一つの掟破りな行為が、とんでもない事態へと発展した。

サーヴァントのキャスターが召喚したサーヴァントは、アサシンのクラスでありながら高い戦闘能力でバーサーカーに善戦し、更に他の英霊の力を使い、極めつけはサーヴァントの数を増やすという信じられない現象を起こしたのだ。

聖杯戦争のルールを破りまくった銀時に、マスターであるキャスターは驚きを隠せなかった。まるで狐につままれたような感じだった。そして驚愕してるのは、キャスターだけではなく、闘いの場に居る全員が目を見開いて言葉を失っていた。

「銀さん。僕達、何かノリで天人みたいな人を倒しちゃったんですけど、何なんですかアレ？ それに、ここ何処なんですか？」

周りをキョロキョロと見回して、新八が言った。

「そうネ。かぶき町と何か違うアル」

神楽も今居る場所が、かぶき町でない事に気付いた。

道端にゴミが落ちておらず、道もアスファルトで綺麗に整えられており、荒れてちょっと汚いかぶき町とは明らかに違う街だ。

「説明は後でしてやつから、今は目の前の問題を何とかしよーや」
「え？」

銀時の言葉に二人が反応した直後、瓦礫を払い除ける音が耳に入ってきた。

音の出所を見ると、バーサーカーが瓦礫をどけて立ち上がるうと
していた。胸部には、万事屋トリオから受けた攻撃の痕が残ってい
る。

立ち上がったバーサーカーを見て、一同は我に帰り、再び緊張が
走った。

「なっ！？ あの攻撃を受けて、まだ立ち上がるの！？」

バーサーカーの驚異的なタフさに、凜は驚愕して目を見開く。

それは新八も同じ、いや、凜以上に驚いていた。銀時と神楽の強
さは、新八が一番良く知っている。その二人、更に定春の攻撃を受
けて立ち上がる巨人を見て、木刀を握る手に力が入る。

銀時達とバーサーカーは、武器を持つて睨み合ったまま動かない。
イリヤからの命令が無いからか、それとも本能で銀時達を警戒し
ているのか、バーサーカーは全く動く気配が無い。先ほどまで力任
せに暴れ回っていた巨人が、微動だに動かない事が、逆に不気味だ
った。

「へー。面白いサーヴァントだね、お兄さん」

緊迫感が漂う沈黙を破ったのは、イリヤだった。

「キャスター。貴女のサーヴァント気に入ったわ。今日はここまで
にしてあげる。帰ろう、バーサーカー」

イリヤの声でバーサーカーは、一同に背を向けて歩き出した。
巨人は大きな肩に、自分の小さなマスターを乗せる。

「バイバイ、お兄ちゃん。生きてたら、また遊ぼうね」

子供らしい無邪気な笑顔で、イリヤは士郎に手を振った。

士郎達が呆然とする中、バーサーカーはイリヤと共に暗い夜道の中に消えていった。

巨人と少女の姿が無くなり、緊迫した空気が消え、一同は緊張の糸が切れる。

「た……助かった、のか？」

「みたいね」

士郎の呟きに、凜は疲れたように答える。いや、実際はかなり疲労していた。特に精神の方は、バーサーカーの威圧感と殺気に押し潰されないように堪えていた。

銀時達もそれぞれの武器をしまい、臨戦態勢を解く。

「あの、銀さん。今の怪物は何だったんですか？」

「何か、屁怒組ヘトリコに似てたヨ」

新八と神楽は、バーサーカーについて尋ねた。ちなみに神楽が言った屁怒組とは、万事屋の近所で花屋を営んでいる天人である。鬼のような怖い顔面を持ち、黒い髪に覆われ、側頭部からは水牛のような立派な角が一对生えて、筋肉質なムキムキな体をしている。そんな屁怒組は、三大傭兵部族『茶吉尼族だきに』の一人で、怪力無双の強者なのだが、動植物を愛する優しい心の持ち主なのだ。生き物のピンチを見ると、怪力を駆使したかなり無茶な止め方をするが、それでも彼は優しい天人なのである。

神楽の言葉に銀時は、「そっぴゃあ、そうだな」と両者の顔を思い浮かべて納得する。

「それで、あの怪物は何なんですか？」

「それは私が説明するわ」

新八が再度聞くと、キャスターが割って入った。
新八と神楽は、キャスターに顔を向けた。

「えっと、貴女は？」

「私はキャスターよ。状況は私が教えてあげるわ。けど、その前に……」

そこでキャスターは一旦言葉を切り、銀時に振り返った。

銀時が怪訝な顔を見ると、キャスターは大きく息を吸い込み、

「銀時！ 貴方は一体何者なのか説明しなさいアアアアアい！」

ありったけの声で叫んだ。

その場にいるキャスター以外の全員は、耳をキーンとさせた。
耳鳴りで頭をクラクラさせながらも、凜はキャスターの怒りに激しく同意していた。サーヴァントを増やすサーヴァントなど、見た事も聞いた事も無い。おそらく過去の聖杯戦争でも、そんな規格外なサーヴァントは存在していない。同じ魔術師として、凜も銀時の掟破りな能力に怒りを覚えずにはいられなかった。

「おまつ……デケー声出すんじゃないよ！ 近所迷惑だろーが！」

「つか、その前に俺達が被害受けてんだろーが！」

「そんな事はどうでもいいわ！ 今一番の問題は、どうして貴方の中からサーヴァントが複数出てきたかって事なのよ！」

「んな事言われてもよお、居たもんは居たんだから、仕方ねーだろ」と銀時は、小石を蹴る真似をする。

「そんないい加減な説明で、私が納得すると思ってるの！？」

銀時が言葉を返す度に、キャスターの怒りのボルテージが上がっ

ていく。

「ちょっとキャスターさん！ 落ち着いて下さい！」

二人の間に新八が入る。こういう争い事を収め、軌道修正するのも新八の役目だ。

「冷静になりましょう。あの、とりあえず僕らに状況を教えて下さい。何が何だか分からないので」

「……分かったわ」

新八になだめられ、キャスターは渋々引き下がり、頷いた。その間、セイバーは定春と向かい合っていた。

「あの、コレは何という生き物ですか？」

「定春アル。可愛いでしょ？」

セイバーが尋ねると、神楽は定春の顎の下を掻きながら答える。神楽の行いに、定春は目を細めて気持ち良さそうにしていた。

好奇心と定春の可愛い仕草から、セイバーも神楽と同じ事をやってみたくなった。

「あの……私も——」

セイバーが恐る恐る手を伸ばした瞬間、定春の大きな口が彼女の頭に噛み付いた。

キャスターは、新八と神楽に現状を教えた。聖杯戦争、サーヴァント、魔術師、銀時達が別の世界からやってきた事も全て――。それらの説明を聞いた後、新八は顎に手を当てて考え込んだ。少し離れた所では、頭に包帯を巻いたセイバーと定春が睨み合っていた。

ややあつて、新八は口を開いた。

「キャスターさん、こんな考えはどうですか？ 僕達は、死んで『英霊の座』という場所に辿り着いた。そこで銀さんが会った二人組は、サーヴァントの数の調整の為に僕達を一つの存在にして、一体のサーヴァントにした」

新八の説明を聞くと、今度はキャスターと凜が考え込んだ。

実際、新八の推理は当たっていた。全身タイツ二人組は、人数が多い銀時達の魂を無理矢理一つにまとめた事で、一体のサーヴァントに仕立てあげたのだ。

「……そうねえ。他に考えは無いし、それで納得するしかないわね」

凜が諦めたように言った。説明を聞いても、やはりサーヴァント複数は納得したくない状況には違いないのである。

「はあ。もういいわ。アンタ達と付き合っていると調子が狂う上に、頭が痛くなってくるから、今夜はもう戻るわ」

額を押さえながら、凜は歩き出した。

途中、凜は足を止めて振り返り、士郎を見た。

「分かってるわね、衛宮君？ 次に会う時は、私達は敵同士よ」

「ああ、分かってるよ、遠坂」

士郎は頷く。

聖杯戦争に参加している以上、凜との闘いは避けられない。それでも士郎は、凜がいい奴だと思っており、出来れば闘いたくないと考えている。だが、向こうはそうはいかない。凜が挑んでくるならば、士郎も覚悟を決めて受けて立つしかない。

士郎が複雑な思いを抱いてると、凜はキャスターに顔を向けた。

「キャスター。サーヴァントが複数居るからって、勝った気にならないだよ」

「お嬢ちゃん。勝ち気でいかないと、闘いには勝てないわよ？」

互いに不敵な笑みを浮かべ、視線の間で激しい火花を散らす魔術師二人。

二人の静かな迫力に、男性陣は少し後ずさった。数秒の睨み合いの後、凜は去っていった。

「それじゃあ、私達も教会に行きましょう」

「あ？ 教会？」

キャスターの言葉に、銀時は片眉を上げる。

「貴方が召喚された事を報告しに行くのよ！ ついでに坊や達のこともね」

銀時に声を荒げた後、キャスターは新八と神楽、定春に目を向けた。

「ああ、そっぴゃあ、そうだったな」

頭を搔きながら、銀時は本来の目的を思い出す。
凜と同じく軽い頭痛を覚えて、キャスターは額に指を当てる。
キャスターの苦勞してる様子を見て、新八は苦笑いを浮かべて同情していた。

「ほらっ、さっさと行くわよ」

銀時達を連れて、キャスターは教会を目指そうとした時だった。

「あの、銀時さん！」

後ろから士郎が呼び止められた。

「あ？ 何だ？」

呼ばれた銀時は足を止め、振り返った。

「さっきは、銀時さんのお蔭で助かったよ。ありがとう」

「礼なんざいらねーよ。後、銀時さんはやめろ」

「それじゃあ、銀さん、でいいですか？」

「ああ」

気だるげな声で士郎に返すと、今度はセイバーが言った。

「ギントキ。次に会う時は、私達が闘う時です。その時は、手加減などしませんよ」

「へいへい。わーっ たよ」

面倒くさそうに、銀時はいい加減に答える。

「あつ、そうだ」

銀時は思い出したように呟き、士郎に顔を戻す。

「衛宮つつたけ？ 突っ走るのもいいけどよ、自分の事とか後先ちゃんと考えて動けよ」

じゃーな、と二人にヒラヒラと手を振って、銀時はキャスター達と教会へ向かおうとした。

その時だった。

「いや、俺の事置いてくなよ！」

夜の街に悲鳴のような声が響いた。

一同が目を向けると、地面に座り込んでるキャスターのマスター

——零寺の姿があつた。

「あつ、わり。忘れてた」

零寺に気付いた銀時は、片手を顔の前に上げて詫びる。が、銀時の顔からは反省心が全くうかがえない。

その上、

「あれ？ 誰ですか、この人？」

「夜中に大声出して、うるさいアル！ ガキは家帰って、母ちゃんと同じ布団で一緒に寝てな！」

地味な新八に「誰？」と言われ、神楽からは容赦の無い毒舌を受けてしまう。

あまりな仕打ちに、零寺の目には涙が浮かんだ。

*

忘れられてた零寺を加え、しばらく歩いて一同はようやく教会に到着した。

教会の前に着いた銀時は、僅かに顔をしかめた。普通、教会とは神聖な場所のイメージがあるが、この教会からは何だか神聖とは違う雰囲気を感じる。むしろ、神聖とは正反対の得体の知れない不気味ささえある。

教会にはまだ明かりがついており、扉の隙間や七色のステンドグラスから光が漏れ出ている。

「それじゃあ、行くわよ」

キヤスターが確認するように言うと、一同は頷いた。扉を開け、中に入る。

礼拝堂の一番奥に、一人の神父の姿があった。大柄で黒い神父服に身を包み、首から十字架を提げている。

「ようこそ、言峰教会へ。私は言峰綺礼と言つ」

神父——言峰は聖書を片手に、銀時達を迎え入れた。

言峰を見た瞬間、新八は妙なざわめきを抱いた。上手く表現できないが、言峰は自分達とは異質な人間に見えるのだ。人の心を見透かすような目、不敵な笑み、物静かで、近寄り難い雰囲気があった。見た瞬間に、新八は言峰の事が苦手になった。

「おや。キミはキャスターのマスターではないか」

言峰は、一同の中から零寺の姿を見つけた。

「ども」

零寺は短く挨拶する。新八と同じく、彼も言峰を苦手としているようだ。あまり彼に関わりたくない様子をしている。

「今夜は何の用かね？ キャスターの他にもサーヴァントを連れてくるようだ」

言峰は、銀時達を見ながら零寺に来訪の目的尋ねた。教会の神父であるが、言峰も魔術師である。すぐに銀時達がサーヴァントである事を見抜いた。

「サーヴァントの召喚を報告しに来たのよ」

「何？」

零寺の代わりに答えたキャスターの言葉に、言峰は僅かに目を細めた。

「私が、この銀髪の男——アサシンのサーヴァントを召喚したのよ。それで、後からアサシンのサーヴァントが坊や達と犬を含めて、計四体になったのよ」

「何だと！？」

言峰の顔から笑みが消え、目を大きく見開いた驚きの表情へと変わった。

この場に凜が居たならば、今の言峰の反応を見て驚いていただろ

う。言峰が顔に表すほど動揺する事など、滅多に無いのだから。その言峰が動揺するほど、今回の事態は異例なのだ。

しかし言峰の驚きも、すぐに消えた。早くも冷静さを取り戻し、面白いモノを見つけたような笑みを浮かべた。

「……そうか。面白いサーヴァントが居たモノだな。衛宮士郎といい、キミ達といい、今回の聖杯戦争は実に楽しめそうだ」

愉快そうに笑う言峰と、何故か陰しい表情をしてる銀時の目が合う。

両者は沈黙を守ったまま、ただ目を合わせている。

言峰は銀時の心を探ろうと、銀時は言峰に心を探られまいと沈黙の攻防をしているようだった。

礼拝堂の空気が、急に重くなったように感じる。

新八達は、二人の静寂なやり取りをただ眺める事しか出来なかった。

やがて言峰が、フツと短く笑い、沈黙を破った。

「それでは、ここに聖杯戦争の開幕を宣言をする。各自が各々の信念に従い、力を駆使し、思う存分競い合いたまえ」

礼拝堂に、言峰の開幕宣言が響く。

開幕宣言を聞いているのは、キャスター達だけである。この聖杯戦争にとって、開幕の宣言などあってなきようなもの。開始の時期など関係なく、皆、聖杯を求めて殺し合うだけだ。

用が済み、キャスターが帰りましようと言って、礼拝堂から出ようとした。

「アサシンのサーヴァント」

背後から言峰に呼ばれ、銀時は振り返った。

「差し支えなければ、キミの真名を教えてはくれないか？」

「……銀時。坂田銀時だ」

銀時の名を聞くと、言峰は口元を歪め、言葉を発する。

「坂田銀時。汝の憎悪が、この聖杯戦争で消える事を祈ろう」

言峰の言葉を聞いた瞬間、銀時は目を見開き、激しく動揺した。そして動揺は怒りへと変わり、銀時は鋭い目で言峰を睨む。が、銀時の睨みを受けても言峰はまるで動じない。まるで鋼鉄の仮面を被ってるかのように、言峰の顔は変わらない。

軽く舌打ちをして、銀時は言峰に背を向けて歩き出した。新八が抱いた言峰の印象を、銀時も感じていた。そして先ほどの言峰の言葉で、彼に対する不快感が強まった。

言峰の視線を背中に感じながら、銀時はキャスター達と共に教会を出た。

星が綺麗に輝く寒空の下、聖杯戦争が本格的に始まった。

第六訓：警護と言えばサングラスに黒スーツ（前書き）

更新が遅れて、すいまっせんしたアアアア！

これからは、出来るだけ間を空けないように努力します。
では、久しぶり、超久しぶりの銀魂×Fateをどうぞ！

第六訓：警護と言えばサングラスに黒スーツ

彼女は、夢を見た。

荒れ果てた地に築かれてるのは、山。死体の山山山、山山山。

多くの死体の山が築かれた地には、刀が突き刺さっていた。一本や二本ではない。死体の数と同数の刀が、刃に鮮血を濡らし、まるで墓標のように地に突き立っている。

まるで地獄。人々が想像する地獄を現世に具現化された、恐ろしい光景だった。

その死者の世界には、生きている者も居た。刀、斧、金棒、様々な武器を持った異形の姿が並んでいた。牛の頭部に屈強な体、鋭い牙を覗かせた半獣の怪物——まさに異形と呼べる姿の生者が、円を作って二人の生者を囲んでいた。

二人の生者は、人間だった。

一人は、長い黒髪の侍。

もう一人は、銀髪の侍。

二人以外の味方は、皆倒れて全滅してしまった。異形の大軍に囲まれ、二人は互いの背を合わせて座り込んでいた。

一目で戦場は、絶体絶命だと解る状況だった。

「……これまでか」

口を開いたのは、長髪の侍だった。

「敵の手にかかるより、最後は武士らしく、潔く腹を切ろう……」

絶望的な状況に、長髪の侍は死を覚悟した。
その時、後ろに座っている銀髪の侍が言う。

「馬鹿言ってんじゃないよ。立て」

長髪の侍が振り向くと、銀髪の侍は先に立ち上がっていた。両手で刀を握り、構え、眼前の敵を見据える。その瞳には、まだ生への執念の光が残っていた。

背中で銀髪の侍は語った。

「美しく最後を飾り付ける暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃないか」

銀髪の侍の言葉を聞き、長髪の侍は短く笑った。声を聞いただけで、生きる気力が溢れてきた。死んでしまえば、本当に全て終わってしまう。しかし生きていれば、まだ微かな望みはある。

長髪の侍は立ち上がり、刀を構える。
ソレを背中で感じ、銀髪の侍は言った。

「行くぜ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だ」

短い言葉を交わし、二人の侍は駆け出す。

——つおおおおおおおおおおおおおっ！

叫び声を上げ、眼前に広がる大軍に突っ込んだ。

二人が刀を振るう度に、赤い鮮血が戦場に飛び散る。

その男、銀色の髪に赤き血を浴び、戦場を駆る姿は、まさしく——
夜叉。

魔術の工房として使っている地下室で、キャスターは目を覚ました。

本来、サーヴァントは人間と違って睡眠を必要としない。だが、昨夜はキャスターにとつて大変な一夜だった。ツツコミ、バーサーカーとの戦闘、銀時が見せた強さ、複数のサーヴァント出現という規格外の出来事で頭が混乱し、疲労も大きかった。そのせいか、零寺の家に帰ってから、すぐに地下の工房で眠ってしまった。

目覚めたキャスターは、今さっき見た夢を思い返す。

「今の夢は……銀時の、過去……？」

サーヴァントと繋がっているマスターは、こうして夢で相手の過去を見る事がある。

「あの銀髪の侍……アレは、やっぱり銀時よね……」

顎に手を当て、考える仕草をする。

自分のサーヴァントである銀時は、普段は死んだ魚のような目をして、やる気の欠片も感じさせない気だるさを漂わせている。しかし、闘いとなれば別人のように目と動きが豹変したのだ。まるで、夢で見た銀髪の侍のように――。

仮にも英霊に選ばれた人間。普段はグータラしているが、銀時も重く辛い過去を背負っている。

その事を、キャスターは夢で知った。

銀時に対する認識を少し改め、キャスターは地下室を出た。階段を上っていくと、香ばしい香りがした。香りは広間から漂っている。おそらく、誰かが朝食を作ったのだろう。

香りにつられるように広間に顔を出すと、キャスター以外の全員が集まっていた。それぞれ席に着き、長テーブルにはオカズが盛っ

である皿が並べられて朝食の用意は万全である。

着ていたエプロンを畳む新八が、やってきたキャスターに気付いて挨拶をする。

「キャスターさん、おはようございます」

「ええ。おはよう、坊や」

軽く挨拶を返し、キャスターも席に座った。

こうして全員が広間に揃った。

「新八っ！ キャスターも来たから、早く朝食にするアルヨ！」

もう待ちきれないと言った感じで、神楽は箸をテーブルにトントンと叩いていた。夜兎族は基本的に地球人よりも食欲旺盛であり、その中でも神楽はかなりの大食いであるから食事が待ち遠しいのである。

「はいはい。それじゃあ食べようか」

——いただきます。

声を揃え、朝食が始まったと同時に神楽が物凄い勢いでご飯とオカズを口の中へ運んでいく。例えるなら、そう、強力な吸引力の掃除機並、いやソレ以上の勢いである。テレ・チャ・ピオンに出場した早食い、大食い選手も真っ青な食いつぶりだった。神楽の凄まじい食欲に、初めて見るキャスターと零寺は箸を持った手を止めたまま半ば茫然となっている。

銀時と新八は見慣れているので、普通に食事を続けている。

「オイ。ボーっとしてると、取られるぞ」

「え……？ ああっ！ 俺のオカズ、もう半分しかねえっ！？」

銀時の声で我に返った時には既に遅く、零寺のオカズは半分程、神楽に平らげられていた。

「テツメツ、クソガキ！ なに俺の分まで食ってんだよっ！」

「全然箸が動いてなかったから、いらなと思ってたアル」

「オメーの食いつぷりに面食らってたんだよっ！ このバキューム娘っ！ オメーの胃袋は宇宙かつ！？」

「朝からガタガタうるさいアル！ そんなに食いたきゃ、パンチ食わせてやるヨ！」

「わっ！ 馬鹿っ、よせっ、ぐばあ！」

朝っぱらから乱闘騒ぎ、と言うか神楽の理不尽な暴力が起こった。顔面に拳を食らった零寺は、赤く腫れた鼻を手で押さえて床に倒れ、涙目で痛みに悶えている。

「零寺さんっ！ 大丈夫ですか！？」

万事屋唯一の常識人であり良心である新八が、すぐに倒れた零寺に駆け寄った。

「神楽ちゃん！ いくら何でもやりすぎだよ！」

「私は腹が空いてるアル。私の食事の邪魔する奴は、誰だろうと許さないネ」

「いや、横暴にも程があるよ」

良心である新八が訴えるも、食欲魔神の神楽では相手が悪すぎる。横で騒ぐ三人を横目に、キャスターは向かいの銀時に話しかけた。

「貴方達って、いつもこんな感じなの……？」

「いや。今回は、神楽の奴が腹を空かしてた事と、零時がボーっとしてた事が重なっちゃったただけだ」

慣れた感じで答える銀時に、キャスターは「ハア」と頷いた。

騒がしい朝の光景に最初は面食らったが、零寺がどんな酷い目に遭おうとどうでもよかったので食事を摂る事にした。サーヴァントになって、初めての食事だった。誰が作ったのか分からないが、なかなか美味しかった。一流とはいかないが、平凡な家庭に合うような、いたって普通の味だった。

朝食を続けながら、キャスターは向かいの銀時を見ていた。夢で見た銀時の姿が、まだ頭の中に残っていた。戦場で多くの仲間を失ったであろう銀時が、聖杯戦争という闘いの場に再び突っ込む事になった、どんな気持ちなのか少し気になったのである。

キャスターの視線に気付いて、銀時は顔を上げた。

「ん？ 何だ、人の顔ジロジロ見て？」

「いいえ。何でもないわ」

顔をそらし、キャスターは食事を続けた。

長テーブルの隣では、白い塊——定春がご飯をガツガツと食べていた。

*

朝食を済ませた一同は、街に出ていた。

外出の目的は、大きく分けて二つある。

一つは、銀時達の服を買うこと。霊体化が出来ない銀時達は、そのままの格好では目立ち過ぎる。夜なら人気は少ないが、日中とな

ると人の目が多いので動きづらくなってしまう。今はロングコートを着ているが、やはり動きやすい服を仕入れておくべきだ。

二つは、食糧確保。大食い娘の神楽と巨体犬の定春が、霧崎家の食糧を食いつくしてしまったのだ。このままではマズイという事で、食糧調達に出たのである。

そういう訳で、一向はまず洋服店を目指した。重い食糧を持って店を回るより、先に服を購入しようと考えたのだ。服ならば、そのまま着てしまえば荷物にならない。

「うわー！ 色んな服があるヨ！」

洋服店に入った神楽は、店内に並ぶ様々な服に目移りしてはしゃいでいた。怪力無双で大食いでも、やっぱり女の子である。

それぞれ自由に回り、服を選ぶ。

ちなみに、キャスターは霊体化して零寺の側についている。

「あつ、銀ちゃん、新八。コレなんてカッコよくないアルカ？」

「あ？ どれよ？」

神楽の声を聞き、銀時と新八が歩み寄った。

神楽が見つけた服を見て、二人は顔を見合わせた。

服を購入し、洋服店を後にした一行は再び街中を歩いていた。

ただし、先ほどと違う点は銀時達の服装が変わっているところだった。しかも、万事屋一向の服装に、街を歩く人々の注目は釘付けになっていた。

万事屋が着ている服は、黒のスーツだった。上下を黒く染め、顔には黒のサングラスがかけられている。新八と銀時は、それぞれマスターである零寺の前後に付いて進んでいた。その光景は、さなが

ら要人を護るボディガードのようだった。

——って、何でよりもよって、そんな目立つ服を選んだのよオオオオオ！

霊体化してるキャスターが、銀時達の服のチョイスに内心シャウトした。

「あの……何で、黒スーツ何スか？」

二人の間に挟まれてる零寺も、困惑の表情を浮かべている。すると、銀時が答えた。

「いやあ、やっぱ警護って言ったらこの格好しかないと思ってよ。」

『S●』も映画化した事だし、ソレに便乗してだな……」

「いや、便乗しなくていいから！ 目立ちまくりだから！ 何のために服買いに行ったのか、分からなくなったから！ つーか、お前もボケるのかよ！？ ツツコミじゃなかったの？」

後ろに付く銀時にツツコンだ後、前を歩く新八に問うた。

「いやあ、こういうのって雰囲気が大事かなと思って」

「お前等、俺以上の馬鹿なの？ 周り見てみ。スゲー怪しまれてるから。」「お母さん、あの人達何？」「シッ、見ちゃダメよ！」

”って親子の会話が今にも聞こえてきそうだから！」

「零寺様、ツツコまりました。どうぞ」

「ラジャー。後三十秒で、目的のスーパーに到着します。どうぞ」

背中を護っている銀時が、どこで手に入れたのか、手に持つ無線機で前を護る新八と連絡を取り合う。

二人のボケに、零寺は頭を抱えた。

「無意味に無線かよ……。普通に話せよ、普通に。声丸聞こえじゃねーか」

「零寺様、またツツコミました。どうぞ」

即座に新八が、無線で銀時に知らせた。

「ラジャー。これから呆れます。どうぞ」と銀時も返す。

『いちいち報告しなくていいわよっ！』

銀時の報告にツツコンだのは、今度は零寺ではなく霊体化したキヤスターだった。パスを通じて、直接銀時の頭の中にツツコミを入れたのだ。

「零寺様が呆れる前に、キヤスターにツツコミました。どうぞ」

「ラジャー」

「……付き合ってらんねー」

溜め息をついて、零寺はもう諦めた。

ソレは霊体化してるキヤスターも同様で、もう二人が何かボケてもツツコまないと決めていた。

ふとキヤスターは、ある違和感に気付いた。メンバーの中に、神楽の姿が見当たらないのだ。洋服店で、銀時達と同じ黒スーツを購入して着替えたところまでは確認している。いつの間に消えたのか、キヤスターは不審に思いながら周囲を見回す。しかし、やはり神楽の姿は見えない。一人で何処かフラついてるのか、敵サーヴァントの襲撃を受けたか、キヤスターの頭の中で様々な可能性が駆け巡る。しかし、キヤスターの心配は杞憂に終わった。

目的のスーパーに到着し、自動ドアが開くと、店内に神楽の姿を見つけた。銀時達と同じく黒のサングラスに黒のスーツを着ている少女は、間違い無く神楽だった。その神楽は、手に黒い機械を持つ

て縦に積み重ねてる買い物籠の前に座り込んでいる。

ピーピーと音を発する機械を片手に、空いてるもう片方の手に握られてる無線機に声を送る。

「安全確保。買い物籠前に誘導して下さい。どうぞ」

「買い物籠に危険物つて、どんなトラップだよ!？」

思わず零寺は、声を上げてツツコんだ。

神楽が手に持っていたのは、金属探知機だった。買い物籠に仕掛けが無いのか、確認していたのだ。

「いやあ、食材を籠の中に入れた瞬間にドカン的な」と銀時。

「食材に見惚れてる隙にドカン的な」と涎を垂らす神楽。

「いやっ、こんな発想する奴いないだろ。んで、食材に心奪われているのは、お前の方だチャイナガール」

スーパーの入り口で、黒スーパトリオと口論をする零寺は、超目立っていた。とても聖杯戦争に参加してるマスターとは思えない、目立ちっぷりである。

アホみたいに目立ち、馬鹿みたいに騒いでる馬鹿四人を見て、キヤスターは軽く頭痛を憶えて溜め息をついた。

——こんなんで、本当に大丈夫かしら……？

キヤスターの不安は、積もるばかりだった。

第七訓：買い物前に所持金の確認くらいしておけ（前書き）

危ない危ない。

また長期停止になるところだった（汗）

更新が遅れてすみません。

では、久々の本編をどうぞ。

第七訓：買い物前に所持金の確認くらいしておけ

銀時にとって、ソレは僥倖だった。

スーパーで食材を選び、買い物籠の中に入れながら店内を回っている時に、ソレを見つけた。コンビニで探した時にも見つからなかった物が、目の前にあるのだ。ソレは、例えるなら朝、出勤前の父親が毎朝読む新聞のような物だった。銀時にとって、週の始まりのアイテムでもある。

週刊少年ジャンプが、ソコにあった。

「ジャンプじゃねーかアアア！」

周りの目も気にせず、銀時は歓喜の声を上げて、雑誌置き場に向かって駆けて行った。その様子は、欲しいオモチャを見つけた子供のようなはしゃぎっぷりだった。

「あつ！ ちょっと銀さん！」

「だから、目立つなっつーの！」

新八と零寺が声を飛ばすが、ジャンプを見つけてテンションを上げてる銀時には届かなかった。

「新八、零寺、あの馬鹿は放っておくアル。ここは他人のフリするのが一番ネ」

「いや、見捨てるの早過ぎるよ、神楽ちゃん」

神楽の素早い切り捨てに、新八は苦笑する。

『どうする、キャスター？』

『神楽の言う通り、放っておきなさい。昼間は基本的に闘いは行われないし、銀時なら一人でも問題ないでしょう』

『アンタも切り捨て早いな、オイ。あつ、いや、早いですね』

神楽に同調するキャスターに、零寺は戦慄を憶えた。自分も使えないと判断されたら、こんな感じで早々に切り捨てられるのかな、と考えてしまう。

なので、今、零寺に出来る事は反抗的な態度を見せず、キャスターの言葉に従う事だった。

諦めの溜め息を吐く零寺の隣で、新八は銀時の背中に声をかけた。

「銀さん。僕等、先に会計済ませて家に戻ってますからねー。って、聞いているかな、あの人？」

多分聞こえてないな、と思いながらも新八は零寺達とレジへ向かった。

案の定、ジャンプの事で頭が一杯の銀時には新八の声は聞こえてなかった。

喜色満面で、銀時はジャンプに手を伸ばした。

その時、横から別の手が伸びてきた。

ジャンプに伸びる手は、ピタッと動きを止めた。

「ん？」

銀時と隣に居る男は、互いに顔を見合わせた。

相手は、整った顔をした金髪のイケメンだった。見た目二十代中頃で、黒のライダースーツを着ている。人間離れた紅い瞳は、全てを見透かすような眼力を秘めてる感じがして、神秘的にすら思え

る。見た感じの態度も偉そうな感じで、『俺様』的オーラを身に纏っている。

両者は一旦手を引き、互いを指差す。

「え？ オタク、ジャンプ買いに？」と銀時。

「貴様もジャンプか？」と金髪の男。

改めて、互いの目的が一緒である事が分かった。

「まいったなー。一冊しかねえや」

「ならば、コレは我が頂^{おれ}く。貴様は他を探すがいい」

「オイオイ、ちょっと待てよ」

ジャンプを取ろうとする金髪の男の手を押さえ、銀時は言った。

「何勝手に持ってこうとしてんだ、兄ちゃん？ コレは俺が先に見つけたジャンプだ。俺が貰^{もら}ってく」

「ほざくな、雑種。コレは、我が店に入^いった時に見つけた物だ。分かったら、さつさとその薄汚い手をどけろ！」

「テツメ……！」

金髪の男の言葉に、銀時は額に青筋を浮かべた。引き攣^{くわ}った笑みを浮かべて、掴^{つか}んでる手に更に力を込める。

「馬鹿言^いってんじゃねーよ。俺なんか、この店を見つけた瞬間にジャンプの存在を感じ取^とったんだぞ。店に入る前から見つけてた、俺の方が早い！」

「いや、我はジャンプがあるこの店の存在を百メートル先から知っていた」

「俺なんか、アレよ？ この世に生を受けた瞬間から、この店の事

知ってたから」

アホな言い合いを続けていく内に、両者の中でイライラが募っていく。どんなに言っても相手が引き下がらないので、時間だけが無駄に過ぎていった。

先にキレたのは、金髪の男だった。

「いい加減にしろ、雑種！ 貴様のような愚民は、王である我に物を献上するのが当然であろう！」

「んだコラ？ どの我がまま王様だ？ お前のような中身がガキの奴には、ジャンプは早え。コ●コ●でも読んでやがれ！」

「我を子供扱いするな、無礼者め！」

熱くなっていき、二人の声は段々大きく荒くなっていった。

「ええい、とつとと放せ！」

「あっ！」

業を煮やした金髪の男は、銀時の手を振りほどき、強行手段に出た。素早くジャンプを掴み、銀時の横を高速で通り過ぎてレジに入った。

しかし、ここで見逃す程、銀時は甘くは無い。

「待てコラッ！」

素早く身を翻し、床を蹴って金髪の男に横についた。入ったレジが、すぐ近くにあったので、簡単に追いつく事が出来た。

「抜け駆けしてんじゃねーぞ！ コレは俺のジャンプだ！」

「寝言は寝てほざけ！ コレは我のジャンプだ！」

レジの前で、ジャンプを巡って大の大人二人が口論する姿は、恥ずかしい光景だった。

知り合いが居たら、赤面してる場面だろう。早々に銀時を置いて帰ったキヤスターと神楽の判断は、間違っていなかった。

「ハイ、金！」

「いや、我が買っ！」

二人は叩きつける勢いで、同時に金を払った。

冷静に小銭を数えるレジの店員の前で、銀時と金髪の男は大人げない口論を再開する。

「テツメ、いい加減にしろよ！ いい大人がジャンプなんか読んでんじゃねーよ！」

「ソレは私の台詞だ！ ジャンプなど読んでる、貴様の方こそ中身が子供だろう！ ジャンプを卒業して、大人になるがいい雑種！」

「あのー」

二人の口論に、レジの店員が声を挟んだ。

「ああ？」

一旦口論を止め、二人はレジの店員に顔を向けた。

感情が読み取れない無表情な顔で、レジの店員は告げた。

「すみません。二人とも、お金が足りません」

「え？」と茫然となる二人。

「いや、お金が足りません」

「え……？」

「二人合わせても、ギリギリ足りないんですよ。すいません」

店員の言葉に、銀時と金髪の方は、言葉を失くして茫然と立ち尽くしていた。

*

「あーあ。やっとジャンプ見つけたつてのによお……」

道を歩く銀時は、猫背で重い足取りをしていた。

結局、金が足りなかった銀時と金髪の方はジャンプの購入を諦めたのだった。スーパーの前で別れ際に、「覚えてろよ、雑種」と睨まれた。銀時も睨み返し、泣く泣く帰宅する事にした。

「つーか、アイツ等、何で俺を置いて先に帰ってんだよ。少なくとも、零寺の奴が居れば、足りなかった分の金貰ってジャンプ買えたかもしれねえのによお」

ジャンプを見つけた感激のあまり、新八達の声が聞こえなくなっていた。完全に新八達の事を無視した事を悔む銀時だった。

「いや、今からでも遅くねえ。急いで家に戻って、零寺から金貰えばジャンプが手に入るかもしれねえ。そうと決まれば、善は急げだ！」

決心した銀時は、家に急ぐ為に走り出した。
だが、ここで問題が発生した。

「……此処、何処だ？」

道に迷ってしまった。

まだ詳しく冬木の街を案内されてないので、何処に何があるのかわからないし、家までの道順を覚えてないのだ。行きと帰りとは道の景色が微妙に違うので、何処を進めばいいのか皆目分からなくなつたのである。

いい歳して、銀時は迷子になってしまった。

「オイオイ、勘弁してくれよ。この一刻を争う時に……」

天然パーマの頭を掻き、銀時は顔を顰めた。

立ち止まっても何も解決しないので、とりあえず歩く事にした。

地図でもあればいいのだが、そんな物は手元には無い。適当に歩くしか手段は無かった。ジャンプを早く買いたい衝動から、自然と足が早歩きになる。周囲を注意深く見ながら歩き、零寺の家を探す。そうこうしている内に、日が暮れてきて夕方になってしまった。ジャンプは買えないわ、ご飯は食べてないわ、家は見つからないわで散々だった。

「んだよ、コレよお。全然、零寺の家に着かねえじゃねーか。俺、この街に嫌われてんのか？」

愚痴を零す銀時は、疲れてグツタリとしていた。サーヴァントに食事は必要無いが、気分的に空腹を感じていた。コレは生前、まともな食生活を送れなかった事が原因と思われる。

実は銀時は、零寺の家がある深山町とは反対の新都の方へ向かい、家を探し回っていたのである。

人氣が無くなってきた道の途中で、銀時は足を止めた。顔を上げ、

すぐ隣にある建物を見上げる。ソコは、穂群原学園だった。下校時刻はとうに過ぎていて、周りに学生の姿は見当たらない。学園内にも人は居ないと思われるが、銀時は中が気になっていた。何となくだが、何か感じるのだ。

「ひょっとして、コレが魔力ってヤツか？」

サーヴァントである銀時が、魔力を感知出来ても不思議ではない。ただ、銀時が居た世界には魔術が存在していないので、『力を感じ取る』と言う技も無いので、いまいち確信が持てなかった。

「ちよつくら覗いてみるか」

近くにあつた裏門から、銀時は学園内に入った。

裏門から入って、すぐ目の前に雑木林が広がっていた。温かい季節になれば枝に葉が出て、敷地は緑で一杯なのだろうが、今の寒い季節では殺風景だった。落ち葉が散乱してる地を歩き、敷地を進んで行った。

*

士郎は、鎖で一本の木に縛り付けられていた。

何重にも拘束されて、解く事が出来ない。夕日を受けて、銀色の冷たい鎖が鈍く光っている。

鎖の先には、一人の女性が立っていた。紫色の長髪に、同色のアイマスクを付けた美女である。短いスカートで動きやすい黒のスーツを身に纏い、スタイルの良い高身長で妖艶さと存在感を漂わせている。

妖しく笑い、女性は口を開いた。

「この結界の基点を見つけた貴方は、優しく殺してあげましょう」

背筋が凍るような声に、士郎はゾクリとなる。

目の前に居る女性はサーヴァントで、士郎は彼女が仕掛けた結界の基点を見つけたのだ。ソレを目の前のサーヴァントに見つかってしまい、口封じも兼ねてマスターである士郎を殺害しようとしてるのだ。

アイマスクのサーヴァントは、鎖のついた杭のような短剣——ダガーの切っ先を士郎に向ける。

——マズイ……！

切っ先を向けられ、士郎は冷や汗を流す。一杯に見開かれた瞳には、これから自分の命を貫こうとしてる獲物が映っている。

——このままじゃ殺される……！

死ぬ訳にはいかなかった。

結界が張られてるのは、士郎が通っているこの学校なのだ。正義の味方を目指す士郎にとって、学校の人間を犠牲にする結界は許し難い存在である。何としても阻止しなければならない。

だが、目の前のサーヴァントがソレを許さない。

「その命、頂きます！」

士郎に向けて、ライダーはダガーを突く。

しかし、次の瞬間、甲高い音と共にダガーは弾かれ、宙を舞った。アイマスクのサーヴァントは、突然の出来事に士郎から距離を取り、新たなダガーを構える。

士郎は目を見開いて、目の前に現れた乱入者を見た。

「銀さん！？」

「よお、無事が衛宮？」

黒スーツに身を包み、木刀を肩に掲げた銀時の姿があった。

「ど、どうして銀さんが此処に！？」

「いや、道に迷って適当に歩いてたら、此処から何か感じて来た訳よ。そしたら何だよ、キレーな姉ちゃんと随分と危ない遊びしてんじゃないか」

「いや、別に遊んでた訳じゃ……」

「わーってるよ。言葉のあやだよ、あや」

いつものようにダルそうに答え、銀時はアイマスクのサーヴァントと向き合う。

「よお、姉ちゃん。随分と物騒なモン持ってんじゃねーの。どうだい？ そんなモンより、俺ともっといいモン刺し合わねえか？」

「いや、何セクハラ発言してんだよ！？」

銀時の危ない発言に、即座に士郎がツッコんだ。

一方、アイマスクのサーヴァントは銀時の卑猥な言葉に動揺せず、冷血な笑みを浮かべていた。

「ふふ……いいでしょう。そちらの方面には付き合えませんが、殺し合いましたらお相手しましょう。」

我がクラスは騎乗兵^{ライダー}。あらゆる騎馬を乗りこなし、戦場を駆け回す一陣の疾風」

自らのクラスを名乗り、ライダーは両手にダガーを構えて戦闘態勢に入った。

第八訓：女を捨てたって言っても胸を触られたら女らしい反応をする

衛宮士郎は、放課後遅くまで学校に残っていた。

聖杯戦争に遭遇した夜、士郎は偶然にも学校に遅くまで残っていたせいでランサーとアーチャーの闘いを目撃してしまう。ソレがキツカケとなり、聖杯戦争に参加する事になった。

以前の自分のように、遅くまで学校に残っている者が居ないか見回りをする事にしたのだ。しかし、その時に聖杯戦争の参加者である凜と遭遇してしまう。サーヴァントを連れていない士郎に、凜は激怒する。放課後の学校には人氣が無く、凜は士郎を潰しに襲い掛かった。魔術師としてのレベルが違い過ぎる為、唯一の強化で粘るも徐々に追い詰められていく。トドメを刺されそうになった時、突然巨大な結界が発動して、学校全体を包み込んだ。異変に気付いた凜はアーチャーを呼び、士郎の事は一時置いて結界潰しに動いた。屋上に向かう凜とは別に、士郎は学校の裏の林に足を進めた。ソコで士郎は、学校を覆う不気味な結界の基点を見つける。

ソコへ、結界を張った犯人のサーヴァント——ライダーが彼の前に姿を現した。基点を見つけた士郎を、排除しようと襲い掛かる。人間では太刀打ち出来るハズもなく、士郎はあつという間に追い詰められ、絶体絶命のピンチに陥ってしまった。

そんな時にやってきたのが、死んだ魚のような目をした黒スーツのサーヴァント——坂田銀時である。

こうして、二体のサーヴァントが対峙した。

どこからともなくライダーは鎖付きの短剣——ダガーを取り出し、銀時に向かって放つ。地を滑るように走るダガーは、まるで蛇のような不規則な動きで銀時に迫る。

ソレに対し、銀時は木刀を振るって弾く。離れていては埒があかないので、走って距離を縮める。新たに二本のダガーが襲い掛かってくるが、コレも難なく弾き、ライダーの間合いに入る。

次の瞬間、互いの武器が同時に振り抜かれ、耳に響く高い音が鳴った。強い衝撃が全身を駆け巡り、耐えられずに銀時は押された。

「ぐっ……！」

「なっ！？」

押された銀時は顔を歪め、闘いを見てる土郎は驚いて目を見開く。好機と見たライダーは、畳み掛けるように猛攻を仕掛ける。両手のダガーを巧みに操り、怪力スキルも加わって力強い攻撃が銀時を襲う。

銀時は、ライダーの猛攻に対して防ぐのが精一杯だった。完全に防戦一方の状況になっていた。

——おかしい……。

闘いの様子を見ている土郎は、銀時にある違和感を抱いた。

あのバーサーカーと善戦した銀時が、ライダーに押され続けているのはおかしいと思った。

そして、土郎が抱いてる違和感は、銀時自身も憶えていた。

——クソッ！ どうなってんだ？ 体に力が入らねーし、上手く動かねえ！

自分の体が、思うように動かない事に戸惑い、苦い顔で舌打ちする。違和感の正体が解らず、イライラが募る。

その心の乱れを敏感に感知して、ライダーは両腕を交差する形で振り抜く攻撃を繰り返す。轟音と共に、火花を散らして銀時の木刀が弾かれ、防御が崩れる。

「やべっ！」

「遅いです！」

銀時の反応も間に合わず、ライダーの鋭い蹴りがから空きの腹にめり込む。鈍い打撃音と共に、銀時は後方に吹き飛ばされ、木に叩

き付けられる。

「銀さん！」

闘いを見守っている士郎が、声を上げた。

「解せませんね」

追撃をせずに、ライダーは銀時を見つめる。

「あのバーサーカーと互角の闘いを演じた貴方の实力は、その程度なのですか？」

バーサーカーと銀時の闘いは、ライダーも知っていたようだ。それ故に、今の銀時の弱体化が解せぬらしい。いかにライダーが怪力スキルを持っても、力勝負で銀時が一方的に押されるのは妙だと思ったのだ。

「ったくよ。サーヴァントの女つてのは、皆こうなのかねえ。おっかなくてしょうがねーや」

余裕の態度を見せて立ち上がる銀時だが、内心では自身の異変に動揺していた。

士郎は考えた。魔術師としても半人前で、闘いに参加しても足手まといになる自分は、考える事しか出来なかった。勿論、銀時の弱体化についてだ。士郎は、バーサーカー戦と今のライダー戦で何か違いがあるのでは、と睨む。あの夜の闘いを思い出して、必死にその“違い”を探す。

そもそも、『坂田銀時』と言うサーヴァントの存在が、他のサーヴァントと違うのだ。何より、銀時、新八、神楽、定春の三人と一

匹で一体のサーヴァントとして召喚されたのだから。

「あっ！」

ソコまで考えた時、士郎は銀時弱体化の謎が解けた。

「銀さん！ わかりましたよ、銀さんが弱ってる理由が！」
「あ？」

声を上げる士郎に、銀時は怪訝な顔を向けた。

士郎は、自分の考えを話した。

「あくまで俺の仮説なんだけど、銀さんが力を出せないのは、もしかしたら神楽達と別れてる事が原因なんじゃないか？ だって銀さんは、三人と一匹で一体のサーヴァントなんだから、ソレがバラバラになったら力も分断されて弱まっちゃうと思うんだ」

士郎の意見を聞いて、銀時はポカンとなる。

ライダーは攻撃を仕掛けず、そんな銀時を静かに見つめている。
やがて、銀時が林の静けさを破った。

「あれ？ って事は、アレか衛宮？ 今の俺は、新八達と別れてメチャクチャ弱くなってるって事なのか？」

「まあ、そうだと思います」

「って、ふざけんなよ、コラアアアア！」

突如、銀時はキレ出して、地面に転がってる手近な石を投げつけた。

ソレを士郎は、「あぶっ！」と咄嗟に横に動いて避けた。

当然、士郎はこの事に怒りを表す。

「ちよっ……何するんですか、銀さん!？」

「バカヤロー! 何だよ、その天●飯設定!？ 俺あ、四●の拳の使い手じゃねーぞ! つーか、数までピッタリじゃねーか!」

「いや、何の話ですか!？」

銀時弱体化。元々、三人と一匹で一体のサーヴァントである銀時は、バラバラになった事で力が四分の一になってしまったのだ。まさに、天●飯の四●の拳そのものである。

「どうすんだよ? どうすんだよ? オイツ衛宮、いつもの銀さんを返せっ!」

「無茶言わないで下さいよ! 新八達と合体するしか、方法はないですよ!」

八つ当たりを受けて、土郎の声も荒くなる。人が良い土郎にも、我慢の限界と言うモノがある。人間ですから。

「もうよろしいですね?」

二人の言い争いを待っていてくれたライダーも、呆れた声で尋ねた。痺れを切らしたライダーは、答えを待たずに再び銀時に襲い掛かる。

慌てて銀時は木刀を構えるが、対応が遅れた。ライダーから四本のダガーが放たれ、鎖が手足に絡み付き、更には木の枝に巻き付いて体を拘束されてしまった。

「ぐっ!」

鎖を振りほどこうとするが、簡単に外せそうにない。

「では、そろそろトドメを刺してあげましょう」

身動きが取れない銀時を見据え、ライダーは宙に跳んだ。

「うおっ！？ パンツ見える！ パンツ見える！」

跳躍したライダーを見上げ、銀時はスカートの中から僅かに、いやホントに僅かに覗くライダーのパンツに動揺を隠せなかった。

「いや、言ってる場合じゃないでしょう！ 今の自分の状況解ってる！？」

声を上げる土郎は、銀時の体に繋がれてる鎖を解こうと必死に引っ張っている。

頭上に高く跳んだライダーは、ダガーの鋭い切っ先を銀時の頭に向け、重力に従ってほぼ垂直に落下する。

「オイイイ！ 来たぞオオオ！」

「うおおおお！」

敵の接近に取り乱す銀時、焦る土郎。

まさに絶体絶命のピンチの状況で、土郎は渾身の力で鎖を引っ張る。すると、鎖が巻き付いてる木の枝が、バキバキと音を立てて折れた。枝が細い事が幸いしたようだ。

「ふんぬらばアアアア！」

銀時も力を振り絞り、無理矢理に枝を折って、鎖の拘束から解放された。

だが、ダガーを構えるライダーも、すぐ目の前まで迫っていた。

「おわっ！」

咄嗟に銀時は両手を伸ばし、白刃取りの要領でダガーを受け止めようとした。

ほぼ同時に、ライダーも銀時の上に落下した。大きな音を立て、落下点が土煙が立ち込め、落ち葉も舞い上がった。

「ぎ、銀さん！」

後ろに跳んだ士郎は、振り返って声を上げた。
落ち葉が舞う中、土煙が晴れていき、二つの人影が見えてきた。
地面に倒れている銀時の顔に、ダガーは刺さっていない。

「銀さ……」

銀時が無事でホツとしたのも束の間、士郎は衝撃の光景に言葉を失った。

なんと、ダガーの攻撃を回避した銀時が、相手の——ライダーの胸を掴んでいるのである。しかも、両手で一掴みずつ。
見ている士郎の顔が、みるみる赤くなっていた。

「あ……あれえ……？」

引きつった笑みを浮かべ、銀時は自分の手が掴んでる物を凝視する。動揺は行動にも表れ、掴むだけでなく、モミモミと擬音を鳴らして二つの膨らみを揉む。ライダーの胸は大きく、柔らかさも理想的で揉み心地抜群だった。

そして、胸を揉まれているライダーは、

「……」

アイマスクで隠れた顔を真つ赤にさせて、呆然となっている。衝撃のあまり、脳が事態を把握しきれずにいたが、胸を揉まれてる感触で顔が赤くなっていた。しばらく彫刻の固まっていたが、ようやく事態を理解して、体が小刻みにプルプルと震え出す。

そして次の瞬間、ライダーの感情が爆発した。

「何さらしてんですかアアアアア！」

素早く鎖を体に巻き付け、空中に半円を描き、銀時を頭から地面に叩きつけた。

地響きを鳴らして、大地が大きく揺れた。

銀時は、完全に首が地面に突き刺さる形になっていた。

「な、なな、何てハレンチな……！ セクハラです！ 英霊ともあるう者が、何て事するんですか！？ 訴えて死刑にしますよ！？」

興奮と怒りで声を荒げ、ライダーは肩で息をしている。

その時、風を切る音と共に“ある物”が飛来してきた。危険を察知したライダーは、反射的にダガーを振るって飛来物を弾いた。地面に突き刺さった飛来物は、一本の矢だった。

士郎とライダーは、矢が飛来してきた方へ顔を向けた。

「衛宮君！ 大丈夫！？」

「遠坂！ アーチャー！」

林に駆け付けてきたのは、凜とアーチャーのコンビだった。屋上の魔法陣が時間稼ぎの罠と気付いて、林の異変を察してやってきた

のだ。

——くっ……。あのセクハラサーヴァントのせいで、余計な時間をかけてしまいました……！

さすがに二対一では分が悪いので、ライダーは場を離脱した。

「逃げられたようだな」

敵の気配が消えたのを確認して、アーチャーは弓を消した。

「衛宮君。これは、どういうこと？」

「あ……と、遠坂……」

問い掛けてくる凜に、士郎は警戒した様子で後ずさる。さっきまで、校舎で襲われていたのだから、当然の反応である。

士郎の反応を察して、凜は溜め息をついた。

「馬鹿。今更襲ったりしないわよ。それよりも、何があったのか教えてくれる？」

「あ、ああ……」

「そう。じゃあ、まず……アレ何？」

凜が指差す『アレ』とは、地面に首を突き刺した状態の銀時だった。

「うわああああ！ 銀さん！ しまった、スッカリ忘れてたアアア！」

慌てて士郎は、銀時の元へ駆け寄った。

その様子を見て、凜とアーチャーはやれやれとかぶりを振った。

＊

その頃の言峰教会。

「我とした事が財布を忘れるとは……一生の不覚だっ！」

「なあ、やっぱお前アホだろう？　つか、何で小銭だけポケットに入ってたんだよ？」

悔しがる金髪の男——ギルガメッシュに、呆れるランサーがツツ
コミを入れていた。

今日も教会は平和だった。

第九訓：自分の人生を歩む者は皆主役（前書き）

お待たせしてすみません！

最終更新……2月12日か……。ヤバイ……。最低でも月一ペースにしないと。いや、それでも遅いか……。努力します。

読者『サディスト』さんから英雄王に質問。
アంతの一番好きなジャンプ作品は何？

ギルガメッシュ「愚問だな。ワンピースに決まっているだろう。王として、奴が海賊王になる日を見届けてやるのだ！」

読者『烈火竜』さんから銀さんに質問。
銀さん、ライダーの胸はどうでしたか？

銀時「いや、動揺しまくってたから覚えてねーや。つつ訳だから烈火竜さん、俺の代わりに確かめてくれない？」

第九訓：自分の人生を歩む者は皆主役

マジヤバイよ、と銀時は思っただった。

学校から戻った銀時は、霧崎邸の広間で正座していた。額から冷や汗を流し、蒼ざめた顔で、ガタガタ震えていた。広間に漂うのは、その場にある物を押し潰してしまいそうな威圧感だった。空気が酷く重く、呼吸するのも苦しい空間が出来上がっている。

その原因は、銀時の前で仁王立ちしているキャスターにあった。キャスターの額には青筋が立ち、恐ろしく素敵な笑顔を浮かべている。影のかかった笑顔が、より一層恐怖を引き立たせている。明らかに怒っている。

キャスターが怒っている理由は、今日起こった学校の一件にある。学校での騒動の後、土郎と凜に肩を借りる形で銀時が家に帰って来て、キャスター達は事情を聞いた。セイバーのマスターである土郎が通っている学校に結界が張られており、仕掛けた犯人のサーヴァントのライダーに土郎が襲撃を受ける現場に銀時が偶然遭遇して、戦闘になったところまではキャスターも真面目に聞いていた。しかし、ライダーと銀時の戦闘の様子を聞いてから、キャスターは激変した。戦闘の最中に、事故とは言え銀時がライダーの胸を掴み、更には揉んだ事に対して激しい怒りを露にしたのだ。嘘が下手な土郎は、結局洗いざらい状況を吐かされた。

そうして、現在に至る。

激しい怒りを燃やすキャスターの前で、正座してる銀時は滝のように汗を流し、生きた心地がしていなかった。

——ヤバイよ！ マジヤバイって！ どれくらいヤバイかって言うと、マジヤバイよコレ！

追い詰められた状況で、銀時の脳内は完全にパニック状態だった。

「銀時……！」

カッン、と足音を鳴らして、キャスターが一步近付いてきた。彼女の声と足音が、まるで死刑執行を知らせる音に銀時には聞こえた。思わず体がビクツと跳ねて、反応した。そしてキャスターは、大きく息を吸い込み、

「どさくさに紛れて何やってんのオオオオオオオ！」
「ジェットぶっ飛びっ！」

次の瞬間、大声を屋敷の外まで響かせ、渾身の力を込めたコークスクリュー・ブローをお見舞いさせた。プロボクサーも真つ青な切れのあるパンチは見事顔面に命中して、受けた銀時は奇妙な悲鳴を上げて吹っ飛び、壁に激突した。

壁に鼻血の線を描いて、銀時はズルズルと地面に倒れる。

「貴方のような男は、サーヴァントの風上にも置けないわ！ 私は、貴方をそんなサーヴァントに育てた覚えはないわよ！」

「いや、俺もアンタに育てられた覚えはないんだけど……。つか、お母さん？」と瀕死の重傷を負いながらも、銀時は何とか体を起こしてツッコんだ。

「口応え無用！ 二度と破廉恥な真似が出来ないように、私が教育してあげるわ！」

「いえ、結構です先生」。反省してるんで、ホント勘弁してください。ぶあつ！？」

言い切らない内に、二度目のキャスターの暴行を受ける。宙を跳んだキャスターが放ったのは、ドロップキックだった。メキメキと鈍い音を立てて、銀時の腹にめり込んでいる。

そのまま倒れる銀時の体に馬乗りになり、キャスターの容赦の無いバイオレンスは続く。

「固め、ジャイアントスイング、バックドロップ、二段蹴り、ボクシングのスマッシュ等々、あらゆる格闘技の技を叩き込む。華奢な体で最弱のサーヴァントとは思えない猛攻に、たまらず銀時は声を上げた。

「キャスター！ 何かおかしい！ おかしいよ、コレ！ もうコレ、自分のクラス無視してるよ！ 『キャスター』じゃなくて『ファイター』になってるコレエエ！ あべしっ！」

最後に重い拳を受けて、銀時は壁をぶち破って隣の部屋まで飛ばされた。

パラパラと破片が落ちて、埃が室内に漂う。ノックダウンされた銀時は、顔の原型が分からない位腫れあがっていて、勇ましいを通り越して、グロテスクなモンスターと化していた。酷い怪我だが、サーヴァントなので簡単には死なないだろう。元の世界でもハードな事件に巻き込まれ、バイオレンスな女達と関わってボロボロになっているのだから、大丈夫なハズだ。

鬼神と化したキャスターは、肩で息をして活動を休止していた。息を整えると、伏せていた顔を上げた。

「あー、スツキリしたわ」

憑き物が取れたような、晴れ晴れとした笑顔を浮かべていた。

広間の隅では、万事屋メンバーと士郎が一ヶ所に固まっていた。一部始終を見ていた彼等は、あまりの凄惨で恐ろしい光景にガタガタと身を震わせていた。

——キャスターさん、おつかねエエエエエ！

三人の心が、一つになった瞬間だった。

ちなみに、凜とアーチャーは銀時を送って早々に帰宅していた。

＊

「ただいまー」

昼間のバイトを終えて、零寺が帰ってきた。

聖杯戦争中でも、昼間のバイトだけは欠かさず続けている。それに、基本的に聖杯戦争は人目が少なくなる夜に行われるモノなので、零寺も昼間は外に出ているのだ。

「あつ。零寺さん、お帰りなさい」

「おーただいま」

迎えてくれた新八に挨拶を返し、零寺は広間に向かった。

「何じゃこりやあああああああああ！？」

コレが広間に入った、零寺の第一声だった。

壁に空いた大穴の前で立ち尽くし、ワナワナと震えている。

「お……おお、俺ん家の壁が、ぶっ壊れてんじゃねーか！？ 誰だ！？ 誰がやったアアアア！？」

涙を流し、怒りに拳を震わせる零寺は叫んだ。

そこへ、苦笑いを浮かべた新八がやってきた。

「ええつと……実はソレ、キャスター^{ママ}さんがやったんです」

「はあ！？ あの女、何してくれてんだよ！ 壁の修理代だつてな、安くないんだよ！ つーか、そもそも何でこんな事になったの？」

「それがですね……」

新八は、壁破壊に至った経緯を零寺に話した。

「何イイイイ！？ 銀さんが、ナイスバディの美女の胸を揉んだだつてエエエ！？」

「いや、さっきまでの怒りは何処いっちゃったんですか！？」

銀時が胸を揉んだところに食いつき、零寺は興奮しながら悔しがる。

「しかし戦闘中にセクハラ行為とは、銀さんもやるなあ。しかも相手は人間じゃないサーヴァントだから、いくらボディタッチしても法律に触れる事はない。ある意味完全犯罪じゃないか」

「アンタの場合、触れたら瞬殺されるのがオチですよ。ダメだ、この人……完全に思考がスケベな方に働いてるよ」

地味男二人と言う、寂し過ぎる場面であつた。

*

その日の夜、夕食を終えた一同は広間に集まっていた。

ちなみに、壁の穴は零寺と新八の地味男コンビによって、夕飯前に板で塞がれていた。修理代を節約する為に、コツコツ地味な作業で塞いだのだ。それなりに家は大きいがお金の方は意外にも余裕がないのか、単に零寺がケチなのか、財産の方は謎である。

壁の件は置いて、本題に入ろう。銀時達は広間に集まって、会議をしていた。議題の内容は、『アサシンの基本を誰にするか？』

である。ライダーとの戦闘で、銀時達の意外な弱点が発覚した。しかし、早い内に弱点が見つかったのは、寧ろ運が良かったとキヤスターは考えた。もしもバーサーカー戦で、銀時が一人で挑んでいたら、簡単に踏み殺されていただろう。

四人バラバラに動くには危険と判断したキヤスターは、夜だけでなく出来るだけ昼間も四人一体の状態にいる事を提案した。ちなみに、定春は犬だが、面倒なので四人と含ませていただきました。

常に四人一体態勢でいる事は納得した万事屋だったが、一つの問題が浮上した。

ソレは、合体してる間の体の主導権である。誰をベースにするかで、万事屋は揉めていた。

「俺がベースで問題ねーだろ。万事屋のリーダーだし、お前等は吸収される運命にあるんだよ」と主役の銀時。

「嫌アルよ！ 私だって、ヒロインで主役になりたいアル！ 私は聖杯戦争に勝ち残って、冬木市とかぶき町二つの街の女王になるアル！」と食いしん坊神楽。

「ちよつと落ち着いてよ、二人共！ 二人はもう充分に活躍したんだから、ココは僕がベースになる番ですよ！」と地味な新八。

三人の口論は終着点が見えず、もうかれこれ十分以上は続いている。

キヤスターは頭痛を憶えたのか頭を抱え、零寺は欠伸をかいて三人の口論の様子を眺めている。

二人が止めに入らないので、万事屋の口論は更にヒートアップした。

「銀ちゃんばかりズルいアル！ 原作でも二次小説でも主役になって、目立ち過ぎネ！ それに、作者が新しい小説ばかり更新してほったらかしにしてるから、私の活躍も遠い昔のように感じて霞

んでるネ！ 原作ヒロインとしての輝きを取り戻して、私の魅力を発揮させるのは今アル！」

「ちよつとオオオオ！ 神楽ちゃん、原作とか二次小説とか言っちゃダメだから！ ソレに、作者の今も繰り返されてる失敗談まで持ちだしたら、読者の皆が引いちゃうよ！」

神楽のとんでも発言に、眼鏡を光らせてツッコむ新八。やはり、ツッコミをしてる時の彼はダイヤのように輝いている。ツッコミの宝石だね。

「バカヤロー神楽。主役には主役の良さ、脇役には脇役の良さってもんがあるんだよ。牛井屋に行つて、玉ねぎが主役で出たらテンション上がるか？ 上がらないだろう？ お前等玉ねぎは、主役こそなれねーが主役を引き立たせる重要な要素なんだよ。だから、俺が主役になる」^{ベース}

「そんな事で納得なんてしませんよ！ それに世の中には、玉ねぎメインの料理だってあるんですよ！ 玉ねぎだって主役になれるんだぞ！」

「新八！ 玉ねぎ料理つて、どんなヤツアルか？ 玉ねぎ唐揚げアルか？」

「神楽ちゃん！ 論点が思いつ切りズレてるよ！ つて、僕もズレそうになっただけど！」

万事屋の口論は、ヒートアップした事によってメチャクチャになっていた。

このままでは、收拾がつかない。
しかし永遠に続くかと思われた馬鹿口論にも、終わりは訪れるのだった。

「いい加減になさアアアアアアアアアアアアいつ！」

屋敷の外にまで響く、キャスターの叫びパート2だった。
彼女の声によって、万事屋の五月蠅い口論はピタリと止まった。
特に彼女の怒りを買った事のある銀時は、顔色が悪くなっている。
呆れて溜め息をつき、キャスターは言った。

「これじゃあ、いつまで経っても終わらないわ。だから、誰をベースにするかは、貴方達のマスターである私が決めるわ!」

「最初から、そうすればよかったんじゃない……」

「黙りなさい、零寺。手首、飛ばすわよ……?」

「すいませんっしたアアアアア!」

綺麗な土下座を決めて、零寺は謝った。

キャスターが決めた順番によって、体のベースを四人で回す事になった。

ちなみに定春は、テーブルの下で暢気に欠伸をかいていた。

第十訓：イメチェンが必ずしも吉と出るとは限らない（前書き）

投稿者： サディストさんからの質問。

『キャスターに質問。』

怒りモードなら【デンプシーロール】や【オラオラ】も打てる？

士郎に質問。

鬼神化したキャスターに勝てると思う？

答えてくれ。』

キャスター「『デンプシーロール』はテクニックが必要だけど、
『オラオラ』ならイける気がするわ」

士郎「いや、ただでさえ魔術師として上なのに、鬼神化なんかされ
たら勝てる気がするでしないな。俺達、聖杯戦争勝ち残れるかな…
…？」

投稿者： 黒神さんからの質問。
『質問します。』

セイバーと凜へ。

二年後の神楽は巨乳でナイスバディとなっていますが、貧乳である
貴女方はそんな神楽をどう思いますか？（黒笑）』

凜「黒神さん、そんなに私を怒らせたいのかしら？」

セイバー「私は女である前に騎士なので、胸の小ささなど気にしていません。二年後の神楽は大人な感じで良いと思いますが……凜は、何故そんなに怒っているのですか？」

凜「女の魅力は、胸だけじゃないわよ！ エロ神！」

セイバー「り、凜！？ 落ち着いて下さい！」

第十訓：イメチェンが必ずしも吉と出るとは限らない

霧崎零寺。

彼の事を語るのに、多くの言葉はいらない。

役立たずで地味、で充分である。他にも眼鏡と言う特徴が一応あるっちゃあるが、コレは新八と被るので個性としては弱い。後は、キャスターのマスターと言う点くらいしか違いは見当たらないが、主従関係が完全に逆転してるので、情けない印象しかないのが現実だ。

零寺は悩んだ。このままでは、マジでダサくてお荷物な存在——略して『マダオ』に成り下がってしまう。成り下がると言うか、もう既になっているのだが、本人はめげずに考える。

とにかく、今の自分を変えたいのだ。臆病なのは性格の問題だから、すぐに改善する事は出来ない。そこで零寺は、まず見た目から変わろうと考えが至った。

「銀さん、どうですか？」

「あ？」

ソファに寝そべり、ジャンプを読む銀時は気だるげに声を上げた。とても聖杯戦争に参加中のサーヴァントとは思えない姿だが、銀時なのだから仕方ない。

顔からジャンプをズラした銀時の前に、零寺が立っていた。ニヤニヤと笑みを浮かべ、正直気持ち悪い。

「どうですか、銀さん？」

「何が？」

質問の意図が解らず、銀時は片眉を上げて聞き返す。

「いや、ホラ。俺、何か前と違いませんか？」
「別に」

素っ気なく返し、銀時は再びジャンプを読み出す。
しかし、零寺はしつこく尋ねた。

「いや、ちゃんと見てくださいよ！ ホラッ、何か違うでしょ？」
「うるせーな。別に何も……あつ、髪切った？」

「タ●リさん？ いやいや、そうじゃないし。髪切ってませんから。
そうじゃなくて……」

「眉毛切った？」

「いや、切ってませんから……」

「鼻毛切った？」

「切ってねーよ！ つーか、いい加減、毛から離れろよ！ 何で、
そんなに毛に拘るの!？」

我慢の限界に達した零寺は、ついに爆発して声を上げた。
そうじゃなくて、と髪を掻き乱した後に零寺は、自分の顔を指差した。

「ホラッ！ ココですよ、ココ！」

「あ？ ココって……あ……」

零寺の必死の訴えで、ようやく銀時は気付いた。
ある物が、零寺の顔から無くなっているのだ。
そのある物とは——眼鏡である。

「フッフッフ。ようやく気付きましたか？」

腰に手を当て、一人満足げな笑みを浮かべる零寺。

そう、零寺が行った外見変化は眼鏡を外す事だったのだ。眼鏡とは、頭を良さそうに見せる道具でもあり、地味に見えてしまう道具でもある。事実、地味キャラである新八も眼鏡をかけている。ある意味で、諸刃の剣とも言える。そこで零寺は、脱地味を目指して眼鏡を外し、コンタクトレンズに変えたのである。

コンタクトレンズを目に付ける事に、多少苦戦はしたが、何とか上手くいった。

イメチェンを果たした零寺は、銀時の反応を待つ。

「あつそう」

薄い反応を示して、銀時はジャンプに視線を向けた。

沈黙が降りた室内に、パラッとページをめくる音がした。

予想外に薄すぎる銀時の反応に、零寺は呆然と立ち尽くす。

「いや……あの、それだけですか……？」

「他に何て言えればいいんだよ？」

「ほら、『へー、コンタクトにしたんだ。ちよつとはマシになったんじゃない？』とか、何かコメント無いんですか？」

「眼鏡が無くなって、地味が増したんじゃない？」

「うおおおおおい！」

銀時のサラリとした容赦無い発言に、零寺は声を上げずにはいられなかった。

すると、

「うつさいアル！ マダオ！」

「いっばっ！」

自分も騒がしいのに、他人が騒ぐと怒る神楽の鉄拳が、零寺の顔に見事にヒットした。

ちなみに、『マダオ』とは“魔術も口クに使えないダメな男”と言っ意味である。

殴られた零寺は、鼻血流れる鼻を押さえながら起き上がった。

「ちよっ……いきなり暴力は無いだろ、チャイナ娘！」

「お前が、ネバネバしっこく銀ちゃんに訊いたり、うるさく喚くからネ。寧ろ、近所迷惑を防止したから、誉めるヨロシ」

「自分の暴力行為を正当化させやがった……！」

まだまだ文句を言いたいが、また殴られるのは目に見えてるので、とりあえずチャイナ娘への怒りは抑えた。

そして銀時に振り向き、改めて訊く。

「って言うか、地味が増したってマジっすか？」

「眼鏡は新八と被るが、外見的特徴の一つには違いねえ。ソレを捨てるって事は、特徴や個性を捨てる行為に等しいからな。っーかよお……」

銀時は一旦言葉を切り、決定的な言葉を放つ。

「基本、文字だけの小説で、見えない見た目変えたって意味ねーだろうが。それにお前、元々地味だしよ」

——マジでかアアアアアアア！？

シヨックを受けた零寺は、内心にシャウトした。

零寺は屋敷を出て、街のファミレスに居た。

世の中には、二種類の人間が在る。

目立つ奴と地味な奴だ。

地味な奴は、目立つ奴に嫉妬して、中には自分を変えようと努力する者もいる。しかし、ソレが必ずしも成功するとは限らない。空回りしたり、やり過ぎて失敗する時がある。

つまり、人間そう簡単に急に変わる事など出来ないと言う事だ。魔術師と言う特別な設定があるのに、地味な俺って必要ですか？魔術師なのに、ロクに魔術も使えない俺は必要ですか？

マスターなのにサーヴァントに従う形の俺は、必要ですか？読者に感想で、「空気じゃね？」と書かれた俺は必要ですか？ファミレスの席で、零寺は一人ポーツと問い掛けていた。

「あれ？ 零寺さんじゃないですか。何やってるんですか、こんな所で？」

横から声をかけられ、零寺は顔を向けた。

隣の席に、同じく地味なキャラの新八が座っていた。

「ああ、新八君か……」

「どうしたんですか？ 何か元気無いみたいですけど……」

心配そうに尋ねてくる新八の純粋な優しさに、零寺は不覚にも泣きそうになった。

しかし、泣いたら男として情けないと思い、涙を堪える。

「いや、ちょっと屋敷に居づらくてさ……」

「ああ、そういう事ですか。その気持ち解りますよ。僕も、同じよ

うな思いをした事ありますから……」

笑顔で語る新八を見て、零寺は確信した。

新八の言葉は気休めではなく、本当の事を本心から言っているのだと。彼は知らないが、過去の『銀魂』の人気投票で新八は苦い思いをしたのだ。ちなみに、この前の人気投票では、順位が変わらず八位に着いている。凄くね？ もはや、新八の定位置と言っても過言ではない。

気が付けば、二人とも表情を暗くしていた。

「銀さんや神楽ちゃんには華があるのに、どうして僕達には無いんでしょうね……？」

「いやいや、君はまだいいよ。バーサーカー戦の時、銀さん達と揃って一撃決めたじゃん。最後はバシッと『万事屋銀ちゃん』って、メンバーで決めたじゃん」

「あつ、スイマセン。そんなつもりじゃ……」

「いいんだよ、新八君。氣いつかわないでくれ……悪いのは君じゃない。悪いのは地味な俺と、俺を地味にしたクサレ作者だから……」

話せば話す程、空気が暗く重たくなっていった。

それから二人は口を閉ざし、注文した飲み物を飲んで店と一緒に出た。

道を歩く今も、二人の間に会話は無い。例え会話をしたとしても、また空気が重くなるだけだ。

万事屋の良心である新八は、何とか零寺を励ます言葉を探した。しかし、どれも気休めにしかならない感じで、良い言葉が見つからない。

「……決めた」

「え？」

不意に零寺が声を出し、新八は下げていた頭を上げた。

「俺、決めたよ、新八君。デカイ事をやって、華を掴んで地味キヤラを脱する！」

「デカイ事って、何ですか？」

首を傾げる新八に振り向き、零寺は真顔で言った。

「俺達二人だけで、敵マスターを倒す！」

「ええええっ！？」

零寺の案を聞いた新八は、驚いて目を丸くした。

ヘタレで地味な零寺と新八が、二人だけで敵マスターを倒したら確かにそれなりに読者から好評価を得る事が出来るだろう。手柄を立てる事こそ、手っ取り早い目立ち方である。

「ホントにやるんですか？」

「当たり前だ。このままじゃ俺は、魔術も使えないダサイ男——略してマダオに成り下がっちゃう！ それだけは阻止しなきゃならねえ！」

握り拳を作り、零寺は強い決意を表す。

その様子を間近で見る新八は、胸の底から熱い何かが込み上げてくるのを感じた。野望に熱く燃える零寺に感化され、目に光が宿った。

「そうですね……。精一杯頑張れば、僕達だってきつと出来る！ きつと輝ける！」

「そうだ、新八君！ 俺達は輝ける！」

「輝ける！」

声を上げる二人のテンションは、最高に盛り上がっていた。幸い、周囲に人が居ない土手なので、他人から冷たい目で見られる事は無かった。

しかし、すぐに人気の無い場所で盛り上がった事が、凶と出る事になる。

ジャラララ、と鉄の鳴る音が響き、あつという間に二人の体にかが巻き付き拘束した。

「え……？」

零寺と新八は、自分達を縛る鎖を見下ろし、顔を顰めた。

「はっはっはっ！
間抜けなマスターとサーヴァントだね！」

突如、土手の高い位置から男の高笑いが響き渡った。

二人が顔を向けた先には、二つの人影があった。

青い髪がワカメのようにヨレヨレになっているが、顔はイケメンな男だ。士郎と同じ制服を着てるところから察するに、高校生だろう。

その隣に居るのは、零寺と新八を拘束してる鎖の先を持つライダーだった。

「え……ええええええええええ！？」

あんまりの事態に、零寺と新八は青ざめた顔で絶叫するしかなかった。

敵マスターを倒して銀時共を見返そうぜ、オーツ！　と言う計画を立てたが、僅か一分も経たない内に逆に自分達が捕まってしまっ

た。

第十一訓：辛く哀しい時こそ笑え笑え（前書き）

投稿者： サディストさんからの質問

『零寺に質問。』

キャラ建ての為に特技の一つ位はないのか？』

零寺「一応、一つだけ使える魔術があるにはあるけど……うーん、役に立つか正直微妙なんだよな」

『神楽、銀時、キャスターに質問。』

零寺と新八、どっちの方が存在感ある？』

神楽「眼鏡とツツコミがある分、まだ新八の方がマシネ」

銀時「そうだな。零寺の奴も、魔術を使いりやあ少しはマシになるんじゃない？ でなきゃ、魔術師って設定が勿体無えぜ」

キャスター「ツツコミの坊やの方が、まだ存在感があるわね」

『士郎、凜に質問。』

零寺は今後活躍できる見込みはあると思う？』

士郎「霧崎も魔術師なんだから、何かしらの魔術が使えるんじゃないか？ だったら、見込みはあると思うぞ」

凜「はあ……士郎は優しいわねえ。私の意見としては、見込みは薄いでしょうね」

投稿者： h a k iさんからの質問

『銀八先生に質問です。』

変態忍者みたいなライダーさんについての質問です。

なんで武器に鎖を使ったり目隠しをしてるんですか？

やっぱり縛られるのが好きだったりする変態さんなんですか？』

銀八先生「はい、お答えしましょう。あのアイマスクは、強力過ぎる魔眼を封じる為に付けてる物です。決して、そういった趣向がある訳ではありません。間違っても本人の前で、「縛りたいの？ Mなの？」と訊いてはいけません。

それじゃあh a k iさん。鎖を持ってアイマスクを付けて、ライダーの気持ちになって廊下に立ってなさい」

『あと凜さんに聞いてください。』

本編にほとんど出ていなくて、目立たず、格闘技キャラも奪われ、魔術ではサーバントのキャスターに負けている、貧乳な遠坂さん。劣化キャスターと晴れてなった感想は？』

凜「うふふ。h a k iさん、後で二人つきりでお話しましょうか？」

後書きに続く。

第十一訓：辛く哀しい時こそ笑え笑え

人の夢と書いて『儚い』とは、昔の人は上手い漢字を作ったものだ。と零寺は思った。

つい先ほど、土手で掲げた自分達の夢が、今まさに儚く消え去ろうとしている。

新八と共に、『敵マスターを倒して銀時共を見返そうぜ、オーツ！』と誓いを立てた直後に、敵マスターとサーヴァントにアッサリと捕まってしまう、攫さらわれたのである。

場所は、古風な洋館。広い洋館の中は、揺れる蠟燭の明かりのみで薄暗く、妙に不気味な雰囲気漂っている。身近な例を挙げるなら、洋館風のお化け屋敷だ。

そんな今にも何か出そうな薄気味悪い洋館の一室に、零寺と新八の姿があった。腕を後ろに回された状態で体を鎖で拘束され、捕われの身になっている。

ちくしょう、と零寺は心中で悪態をつく。自分を馬鹿にしてる連中を見返したかっただけなのに、神様はチャンスではなく災いをプレゼントしてくれやがった。

結局、自分は変わる事なんて出来ないのか。いや、変わる事さえ許されないらしい。ピンチはチャンスと言うが、度が過ぎるピンチはピンチ以外の何物でもない。

思い返せば、今日までロクな目に遭っていない。キャスターには奴隷扱いされ、そのキャスターが召喚したサーヴァントにまで地味と馬鹿にされ、バーサーカーに殺されかけ、チャイナ娘には暴力を受け、自分を変えようと思いついたら捕まって大ピンチに陥ってしまった。

たび重なる不幸に、零寺は怒りを乗り越して笑えてきた。

「くく……うははははははは！ 殺せよオオオオオ！ どうせ俺な

んで、生きてたってロクな目に遭わねーし、何の役にも立たねーんだ！
もういつそ一思いに殺して、全て終わらせてくれエエエエエ！」

「ちよつ……！ 零寺さん、落ち着いて下さい！」

急に狂つたように涙目で笑い出した零寺を、慌てて新八が宥めるふと新八の頭に、一つのアイディアが浮かんた。

「そうだ！ 零寺さん、令呪です！ 令呪を使って、キャスターさんを喚びましょう！ キャスターさんの魔術なら、ココから逃げる事くらいは出来るハズです！」

令呪は、マスターが持つサーヴァントへの三度限りの絶対命令権
コレに着目した新八は、令呪によるキャスター召喚を提案した。

しかし、零寺は哀しげな笑顔でかぶりを振った。

「無理無理〜！ 助けなんて呼べないよ〜！」

「何ですか？」

「だって、俺の手首に付いてるリング……命令内容に関係無く令呪の発動に反応して、爆発する仕掛けになってんだもん！」

「ええええええええええ！？」

衝撃の事実を知って、新八は目を剥いてシャウトした。そりやあもう、洋館全体に響き渡るような素晴らしいシャウトである。

「いやいやいや、やり過ぎでしょう！　せめて命令内容での制限をつけましょうよ！　そんな枷嵌められたら、令呪の意味が全く無いじゃないですか！　ただのオシアレタトゥーですよ！」

「チクシヨー！ あの魔女、生きて帰ったら絶対ぶつ殺してやるよオオオ！ 死んだ時は、化けて出て呪い殺してやるからなアアアア

ア！
」

絶望的状况に、二人は冷静さを失って取り乱す。

その時、部屋の扉が勢いよく開かれ、人が入ってきた。

「五月蠅いぞ、お前ら！ 自分達の状況が解ってるのか！？」

部屋に入るなり、喚く零寺達を怒鳴り飛ばしたのは、間桐慎二。

紫がかった青い髪が特徴の男で、顔はなかなかのイケメン。実際、学園内でも女子からの人気は高く、休みの時間は大抵数人の女子を引き連れている。

しかし、この時はやかましい二人の声に顔を顰めていた。

そんな不機嫌な慎二の後ろには、彼に付き従うライダーが控えていた。長身のサーヴァントだが、幽鬼のような雰囲気を感じていて、居るのか居ないのかよく解らないような不気味な存在感を放っている。

サーヴァントを連れて強気な慎二に、零寺は顔を向けて声を荒げた。

「うつせーよ、クソガキ！ どうせ俺達は、もう助からないんだ！
だったら、いっそありったけの罵詈雑言をテメーらに浴びせてやるよ！

バーカ！ アホ！ 間抜けヅラ！ ワカメヘアー！ 根暗っ！

巨乳！ 天パ！ 眼鏡！ クソチャイナ！ 『Zero』アニメ化
！
」

「いや、言い過ぎでしょう！ それに、途中にある巨乳は悪口なの？
その後は、僕や銀さん達への悪口になってるし！ 最後の方は
お祝いの言葉になってるよ！」

例え捕われの身になっても、ツッコミを忘れない新八。

言いたい放題言われ、慎二の怒りメーターの針が進む。だが、コは怒りを抑え、腕を組んで上から目線で話しかける。

「おいおい、そう早とちりするなよ。お前らの態度次第じゃあ、生かしてやつてもいいんだぜ？」

「はあ？　どういう意味ですか、ワカメヘアーさんよお？」

自棄になったからか、今の零寺は妙に挑発的になっていた。額に青筋を立て、慎二は怒りに顔を歪めた。

「僕の名前は、間桐慎二だ！　今度その馬鹿にした呼び方をしたら、ただじゃ済まないからな！」

「分かったよ……」

ようやく零寺が引き下がり、慎二は熱くなった頭を冷やす。冷静さを取り戻した慎二は、不敵な笑みで言った。

「まあ、ココでお前らを始末するのは簡単なんだけどさ、敵はお前らだけじゃないんだよね。特に、あのバーサーカー。聖杯を手に入れるのに、あの化け物と生意気なマスターが一番邪魔なんだよ。そこで、どうだい？　僕と手を組まないか？」

「え？」

慎二が持ちかけた取引に、零寺は怪訝そうに片眉を上げ、新八は驚いて目を丸くした。

「僕と手を組む事を約束するなら、命は助けてやるよ。その後は、二人で協力してバーサーカーを潰して、楽に聖杯戦争を勝ち抜く。どうだい？　悪い話じゃないだろう？」

それに、僕には切り札があるんだ。学校に魂喰いの結界を仕掛け

であつて、ライダーの力を強くする事が出来る。僕達が手を組んだら、勝利は約束されたも同然だと思わないか？」

優位な立場に居る余裕から、慎二はベラベラとよく喋る。

この時、凜と士郎が言っていた学校の結界を仕掛けたのが慎二だと知り、新八は彼を睨みつけた。学校に仕掛けられてる結界は、中に閉じ込めた人間を消化するようにドロドロに溶かし、魂を根こそぎ奪い取る最悪の代物だと聞いている。そんな外道な手段を使おうとする慎二に、怒りを禁じ得なかった。

「ふざけるな！ 誰がお前なんかと手を組むか！」

「ウザいなあ」

声を上げる新八を、慎二は濁った目で見下す。

「お前に訊いてないんだよ。僕は同じマスターの、この男に訊いてるんだ」

新八から目を逸らし、零寺に向き直る。

「どうだい？ まあ、僕も気が長い方じゃないからね。出来れば早めに決めてもらえるかな」

催促してくる慎二から目を逸らし、床に顔を向けて零寺は考える。さつきは完全に助かる事を諦め、自棄になって殺せとか色々叫んでいた。しかし、ココに来て相手側から思わぬ誘いが来た。いや、よく考えてみれば、あり得ない展開では無いのだ。バーサーカーのような強大過ぎる敵が現れれば、一時的に徒党を組んで対処する事になる。実際、士郎と凜は学校でライダーに襲われた一件から手を組んでいる。だから、慎二からの誘いも当然と言えば当然なのだ。

助かる可能性が出てきた事で、零寺は考え込む。

しばしの沈黙の後、おもむろに零寺は険しい顔を上げた。

「分かった……。お前と手を組むよ」

「零寺さん!？」

取引に応じる答えをした零寺に、新八は声を上げた。

満足な返答を得て、慎二は歪んだ笑みを浮かべる。

「本気ですか？ 本当に、この人達と手を組む気ですか？」と新八。

「……ああ」

「この二人は、学校の生徒達の命を利用しようとしてる奴等ですよ!？ それに、零寺さん言ってたじゃないですか！ 自分達で敵マスターを倒して、皆を見返してやるって!」

「状況を考えろよ、新八。ココは素直に、大人しく相手に従うのが利口だろ。それに、死んじまったら見返すもクソもねーよ」

現実を見て、冷静な意見を言う零寺。

自力での脱出が無理なら、ココは相手に従うしか残された道はない。そう悟ったのだ。

しかし、新八は納得など出来なかった。確かに、自分達の置かれてる状況は最悪で絶望的だ。自慢じゃないが、新八は銀時のような化け物染みた強さも、神楽のような並外れた怪力も持ち合わせていない。だが、それでも零寺のように利口にはなれなかった。

「零寺さん……確かに、僕達は皆みたいに強くないですよ。剣術では銀さんの方が上だし、魔術ではキヤスターさんの方が優れてる。どんなに頑張つて、あがいても、届かないかもしれない。あの人達みたいになれないかもしれない。」

でも、だからと言って、僕は外道や卑怯者になる気はありません

！　どんなに追い詰められても、他人の命を犠牲にして助かるうな
んて真似は絶対にしない！　僕は侍だっ！　手足が使えなくても、
自分の力で道を開いてみせる！」

今の新八の瞳には、侍としての強固な意思が宿っていた。他者を見下し、命を虫けらのように扱う慎二の濁った目とは正反対の色だ。
新八の熱い語りを聞いて、慎二は腹を抱えて笑った。

「あははははははははは！　お、お前、何マジになってんだよ！
？　僕だったら、恥ずかしくて死ぬね！」

ツボにハマったらしく、馬鹿にした笑いは止まらない。
後ろに控えてるライダーは、一言も喋らず沈黙を守っている。
ややあつて、零寺が口を開いた。

「おい、いつまで笑ってんだよ。お前らと手を組む事は約束したんだ。この鎖解いてくれよ」

「ははははは！　え？　ああ、悪いね。そう急かさなくても、ちゃんと外してやるよ。ただし、サーヴァントの拘束は解かないぜ？　何するか解らないからな」

「構わないよ」

零寺は頷き、慎二は歩み寄って鎖を解く作業をする。

その横で、新八は心中で悪態をつく。見損なったよ、零寺さん。そりゃあ、自分の命が危険なのは僕も分かるけど、だからと言ってこんな人達の言いなりになるなんて。悔しくないのかよ？

歯を食いしばり、新八は悔しさを露にする。

そして、慎二が拘束していた鎖を外した時だった。両手が自由になった瞬間、慎二の顔を掴み、

「オラッ！」

「ぶがつ！？」

顔面に思いつ切り頭突きを食らわせた。グシャッと鼻が潰れる音がして、手応えを感じた零寺は頭を引き、慎二は床に倒れた。

「シンジ！？」

完全に不意を衝かれ、ライダーは慌てて慎二の側に駆け寄った。前を見れば、既に零寺と新八の姿は無かった。全神経を室内に巡らせ、二人の気配を探る。振り返り、二人が別の扉から部屋を出て行く背中が見えた。

慎二は血に染まった潰れた鼻を押さえ、苦痛と怒りに顔を歪めた。

「ぐ……！ アイツ……よくも、僕の顔を……この僕を騙したな……！」

*

「かああああ！ 心臓にワリーゼ！」

廊下に声を響かせて、零寺は廊下を走る。

その後を追う新八が、啞然とした顔で訊いた。

「れ、零寺さん……どうして……？」

「あ？」

後ろを走る新八を一瞥して、前に向き直って答える。

「簡単な事さ。アイツらより、キャスターの方が怖いからだよ」

「え？」

「仮に、俺がああワカメの取引に応じて勝手に手を組んだら、キャスターはどう思う？ 多分、怒るね。何の相談も無しに決めるのもそうだけど、アイツらと手を組んだりしたら学校の結界仕掛けた犯人探ししてる士郎達と早々にぶつかる事になる。そんな面倒な事はキャスターは望んでない。

そうなったら、俺はキャスターからどんな仕置きや拷問を受けるかわからねー！ アイツは、手加減なしで痛ぶってくる……！ それだったら、アイツらに殺されるか、こうして逆らって一か八かの自力脱出をした方がマシだ！」

零寺にとって、それ程キャスターは恐ろしい存在になっているのだ。

しかし、それも無理からぬこと。召喚した日に、最弱のサーヴァントと蔑み、主従関係を逆転させられて部屋に閉じ込められ、ただの魔力供給の道具として扱われてきたのだから。彼女の恐ろしさを、零寺は一番に味わっている。加えて、最近は銀時が犯した不祥事で狂暴性が増しているから、余計に恐い。

苦笑する新八は思った。理由はともかく、魂喰いなんて外道に走る輩との取引を拒否してくれてよかった。後は屋敷から脱出して、結界の犯人の事をキャスターや士郎達に知らせよう。

だが、廊下の途中で二人は走りを止めた。

「げっ！？」

驚く二人の前に、ライダーが立ち塞がっていた。

第十一訓：辛く哀しい時こそ笑え笑え（後書き）

投稿者： 烈火竜さんからの質問

『凜に質問』

巨乳になれる宝具と宝石を生成する宝具、どっちが欲しいですか？

へセイバーに質問』

高級レストランの無料化できる宝具と新しい剣、どっちが欲しいですか？』

凜「宝石よ宝石！ 宝石に決まってるでしょう！ でも……うう、ええい、やっぱり宝石よ！ 貧乳の何が悪いのよ！？」

セイバー「むむっ……！ コレは、どちらも選びたいところですが……では、未知なる味を求めて、『高級レストランの無料化できる宝具』を！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3566/>

Fate/silver night ~ 新・聖杯大争奪戦 ~

2011年11月14日18時50分発行